
ガリア王家に転生しました。（再構成、オリ主転生チート）

TOMOKICHI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガリア王家に転生しました。（再構成、オリ主転生チート）

【Nコード】

N5982N

【作者名】

TOMOKICHI

【あらすじ】

ガリア王家に転生した主人公は自分の身の安全や、精神的ストレスの解消のために青兄弟の和解を目指し動きはじめる。それが全ての始まりだった。

再構成、転生多数、オリ主、チートと言った要素がありますのでご注意ください。

また、風の聖痕の精霊術に近い設定がでています。ご注意ください。

現在再構成中です。暫くお待ちください。

プロローグ

異世界ハルケギニアに存在する王国「ガリア」の首都リュティスの郊外に建造された王城ヴェルサルテイル宮殿。

先王によって開かれたこの城は世界中から招かれた建築家や造園師達の手によって現在も拡大を続けている。

ヴェルサルテイル宮殿の中でも一際目立つのはガリアの王族の青い髪と青い目の様に美しい青いレンガとそれと対比する様な薔薇の色をした大理石によって建てられた王の住む城グラン・トロワ。その一室で新たな命が今、誕生しようとしていた。

齢50を超える国王夫妻の妊娠。それはガリアの王家に新たな人間の誕生と同時に無事に生まれるかという疑問も在った。

それは国王夫妻も同様に考え、ガリア中……否、ハルゲニア中の優秀な魔法使い^{メイジ}。

その中でも医療を得意とする水の属性を持つメイジが集められた。水のメイジ達の力によって大公妃とお腹に眠る命は無事に誕生の時を迎える事が出来たのだ。

無事に産まれて欲しい。

国王は産まれてくる子と妻の無事を祈り、まだかと部屋を回りながらも待ち続けていた。

その様子を見かねて年が二回りも年の離れた弟が妹を持つことになる兄弟の片割れ、シャルルは国王が落ちつけるようにと話しかける。

「父上、落ちついてください」

「しかしだな……」

「父上が言いたいことは解ります。しかし、私達が出来るとは待つことだけです」

むう。と国王は唸り、ゆつくりと椅子に腰を下ろす。

シャルルはほっと一息付き、ソファに腰を深く沈めた。

余談ではあるが、シャルルも数年後に父親と同じ行動に出ることになり兄に咎められるがそれはまだ知ることは無かった。

その後暫くして部屋の静寂を吹き飛ばすように知らせは届いた。

無事に誕生。大公妃殿下も産まれた王子も共に健康と。

それ聞いた国王は飛び出るように部屋を出ていき、息子達もそれに続いていった。

新たに産まれた王子はジョルジュと名付けられ、国中から祝福を受ける。

しかし、ジョルジュには異端を持っていることは今は誰も知ることは無かった。

一つは別の誰かとして生きた記憶。

そして、魔法を生み出す粒を見ることができる瞳を持つ事をジョルジュ本人以外には……。

1 話（前書き）

文章が短いとのご意見が理まりましたので、加筆しました。
どうぞお楽しみを。

1話

オレが目覚めたらいきなり赤ん坊になっていたことはあの時は色々
と慌てたり、怯えたりしたものだっただけ。

目が覚めたら青い髪と目の美人のおばさん…… おばさまと言える人
に抱かれていたり、その夫のフランスというこれまた渋いオジサ
ンに抱かれて

「私がお前のお父さんだよ」

と言うものだから何が何だか分からなくて……泣いた。

大の大人がワンワン泣くのは恥ずかしいものだったが、オレは赤ん
坊だったしカウントに入れないようにしておこう。

それで、オレが泣いた時におばさま…… オレの母さんというコンス
タンスという女性にまた抱かれてそのまま眠ってしまった。

その後夢だと思ったら夢じゃ無かったり、最初は気がつかなかった
けどある『モノ』が見えたり、月が二つあったり、オレの兄弟が2
0歳以上離れていたり、魔法があったり、ていうか地球じゃなくて
ハルキゲニアって言う世界だったりでどう見てもゼロの使い魔です。
本当にありがとうございました。と色々と情報を仕入れつつ何度も
泣いたけれどこれもカウントに入れないようにした。

言葉、通じるんだね。と思ったけどもう考えることすらリソースが
振られないくらい様々な事を知って、驚き、泣くと言う事を繰り返
したものだっただけ。

一通り落ちついた時、『今の自分』を改めて認識した。

オレはガリア王国第三王子ジョルジュ・ド・ガリアなのだと。

そして、1年が経ち思い出したのは『前』の最期の記憶。

階段を踏み外して頭を打ち、そのまま死んでいったという記憶。

あつけないけど鮮烈に覚えた情景に思い出した時、自分が死んで別の誰かになったんだと思つた事と、自分が死んだ事を改めて思い出したことで感情がコントロールできなくてワンワンと泣いた。怖くて怖くて泣いた。

あれが死ぬと言う事なのか。

もう家族には会えないのか。

そう考えると怖くて心が痛くて泣くしかなかった。

わんわんと泣く俺を抱きしめて怖くないよと言ってくれたお母さんの声をオレは忘れる事が出来ないだろう。

いきなり泣きだしたから周りの人間がどうした事かと慌てさせたのは本当に恥ずかしい。

というか泣いてばかりなオレ。

割と泣きだす所為で兄二人から「良く泣く弟」という認識を受けた時はやっぱり泣いた。

そんなオレの評価は早熟で賢く、良く泣く子という認識を受けたまま成長する。非常に遺憾に思う評価である。

3歳になり、とりあえず状況に慣れある程度自由に動けるような歳になった。

容姿はまだ幼児ということもあって可愛いとしか言えないが、両親や兄達に似て将来は美丈夫になるのではないかと思う。

髪は正直ロングというのは好きではないので髪が首にかからない程度にカットしている。

顔のパーツも家族に似ているのだが目つきが猫っぱいと言われた事もある。

総評的には将来有望な男の子ということだろうか。

まあ、王族という補正もあるかもしれないんだけどね。

だけれど自分の青空の様な髪に、海の中から空を覗いた時の様な青い綺麗な瞳も最初は前の自分とのギャップからくる違和感があった。1年もたつてなれた今は少し気恥ずかしいけれど好きな色だと思う。そっぴい、青い髪とかって人間の法則無視しているよなあ。

異世界人だからOKなんだろう？

3歳の誕生日が過ぎて思いだしたのは兄二人のこと。

『無能』のジョゼフことジョゼ兄と『天才』シャルルことシャル兄の事だ。

魔法が使えないだけで他はすべて天才どころか鬼才のジョゼ兄。

魔法や他の事まで優秀なシャル兄。

魔法使いが絶対的な権力を握る世界で魔法と言う力が使えないと言うジョゼ兄は無能という扱いを受け、天才的な魔法を操るシャル兄を王にという声まであるのは必然だった。

正直、父のフランスが無能ならばシャル兄が選ばれた可能性は高い。

だけれど、お父さんも十分に優秀な人であり王だ。

恐らく本当に王として優れた人間は誰なのかもわかってる。

しかし、魔法が使えないと言う事で反発も受ける可能性がある。

二人の息子のどちらを王にするかお父さんは悩んでいるのだろう。

時々、二人を見ている時に険しい顔になるときがあるがそれがその証拠なのかもしれない。

オレの想像にすぎないのだけどね。

ただ、ヘラヘラと王子生活を満喫していたら正直ヤバイです。

原作の流れに流れていくのならこのままだとジョゼ兄はシャル兄を殺す。そして最愛で最も妬んでいた弟を殺したジョゼ兄は、憎しみも愛情も喜びも怒りも悲しみも全ての感情を失ってからっぽな心のまま全てを壊すとするだろう。

過ぎた時間は短いけれど、可愛がつてくれる兄二人がお互いを妬んだまま殺し合わせたくはない。

二人の仲を取り持ちたいと思うのはオレの打算もあるかもしれない。でも、二人に心から笑いあつて欲しいのも事実だ。

また、こういう時原作ブレイクなんて……とかなんとか言う奴が居るのかもしれないが、放置しておいたら主にオレの命とか精神がヤバイ。

下手したら反乱の神輿として担ぎあげられるのかもしれないし、原作通りにタバサ……シャルロットが王位を篡奪すればオレもどちらの陣営に居たのかで物理的に首が飛ぶ可能性もある。

動機としては褒められたものではないかもしれないが、とりあえずの目的として二人の兄の仲を取り持とうと思う。

こういう時、どうすれば良いのだろうか？

そう思い考える。

二人のコンプレックスの原因の大本は魔法であることだ。

魔法をジョゼ兄がドットクラスでも使えたら魔法を諦められたのかもしれない。

シャル兄もジョゼ兄に対抗する為に魔法を鍛える可能性はあつても、自身が王へと言う気持ちは薄くなつていたのかもしれない。

原因であるが、解決もやはり魔法だ。上手く利用できれば二人の仲も取り持つ事が出来るのかもと思つた俺は、魔法を使いたいと駄々をこね始めることにした。

結果として、すごく……穴があつたら入りたいです。

泣いて喚いて叫んでお願いして泣いて泣いてお願いして転がつてと全身で魔法が使いたいですとアピールをしたのは凄く恥ずかしかった。

素直にお父さんに使いたいとお願いすればよかったのかもしれない。

ただ、魔法を使わせてもらえるようになった事を思えば耐えられる話だった。

むしろ思わないと首を括りたくなる衝動に襲われる。なんでもっといい方法思いつかなかったのだろうか。

「それじゃあ、まずは杖の契約だ。この杖を肌身離さず持っていておきなさい。暫くしたら契約は完了する。そうすれば魔法を使えるようになる」

そういつてお父さんから杖を貰う。

木製の豪華な飾りの彫りが入った15サントの短い杖だけど今の自分には長いと感じるだろう。

僕は言われたとおりに肌身離さず持ち始めた。

1日目

杖を離さずに持ったまま城の中を散歩しているとジョゼ兄に会った。ジョゼ兄に杖の契約をしていると教えたら「俺みたいな無能者にはなるなよ」と自虐してくれた。

流石にネガティブな兄さんはダメだと思いとりあえず殴って叱ってみた。

あきらめんなよあきらめんなよおまえなにあきらめようとしているんだようしてあきらめようとしているんだよあきらめたらそこでおわりだろもうすこしがんばってみろよやればできるっていわけているんじゃないのもっとがんばればできるってできるとおもえばできるんだってだからもっとあつくなれよ!!!

と最終的にジョゼ兄と叫んで正直自分でも何を言っているのか解らなかつたけど熱い心を伝えられたから良いかなと思う。

とりあえず修造乙。と言いたくなつた。

なんで修造だったんだろうと今思えば全くわからない。

ジヨゼ兄は「そうだな……俺は今まで熱い心と言っものを忘れていたな」と笑いながら去っていった。

け、結果オーライ？

騒いでいたのでお父さんに怒られてお母さんにお尻叩かれた。グスン。

2日目

ちよつと新しい世界が見えそうな気がした気もするけど気のせいだと思う。

今日はシャル兄に会った。

毎日会えないってどうよと思ったけれど、シャル兄は公爵で自分の領地も持っているし奥さんもいるので忙しいのだろう。

シャル兄さんに杖の契約をしていると話し、兄さんみたいな立派なメイジになりたいと話すと笑顔だけど何か陰がさした気がした。

暗い顔をしてどうしたの？と聞くとハツとして、なんでもない。なんでもないんだと言って去っていった。

……コンプレックス刺激しちゃった？
どうしたものか……。

3日目

今日も杖を持ったまま城の中を歩いた。

貴族の人が居たけど、オレを見たまま

「やっぱり、ありえない……オリキャラなのか……？ それとも……」
とブツブツ言ってた。

同郷の人？

転生者って他にもいるの？

4日目

暇だったのでもうどうにでもなれーと杖を持ったままクルクル回

った。

回ってるのが単純に楽しくなって回り続けていたらふと誰かが見ている事に気がついた。

ふらつく頭を押さえてみればシャル兄だった。

シャル兄はにつこりと笑ったままそのまま去っていった。

俺は茫然として見届けてしまったくあwse drift gyふじこ1p;
@

5日目

見られた。死にたい。

6日目

なんとか立ち直り、杖を持って散歩に出かけた。

今日は東花壇に行ってみることにする。

途中東薔薇騎士団の訓練の姿が見えたので覗いてみた。
薔薇なだけに、ウホツな展開は無かった。そもそも期待したくはない。

覗いていたら魔法も使う訓練のようでそれを見ていた。
まだ使えないけれど眼のおかげで参考になったと思う。
見届けた後、オレはそのまま花壇の方へと向かって行った。

7日目

杖の契約が完了したっぽい気がする。

いまいち正確さが解らん。

こう、ピカーって光ってくれたら便利なんだろうけどね。

とりあえずお父さんへ契約ができたかもって報告に行くことにした。
魔法を使えるのが楽しみだ。

お父さんに報告した所、明日魔法の先生を紹介すると言われワクワクしながら眠った。

次の日、オレは庭に連れて行ってもらい魔法の先生を紹介された。どんな人かと思ったらシャル兄だった。

忙しくないの？と思っていたらシャル兄は思っていた事を感じ取ったらしく

「弟に教える為に暫く仕事を片づけていたんだよ」と言ってくれた。どうやらこの1週間で色々と仕事を片づけていたらしくオレとしては頭が上がらない。

シャル兄の傍にはジョゼ兄も居て、オレが魔法を使える所を見に来てくれたらしい。

でもオレを見るのはついでで、自分も魔法の練習をしにきただけだと言っていたのでちょっとツンデレと思ったけど言葉の通りなんだろうなあ。

話を戻して、シャル兄の講習に戻った。

魔法と言うのは杖に精神力を通し呪文を唱える事により魔法を発現するということらしい。

その際に大事なのが使いたい魔法へのイメージを明確にすることだと教わった。

説明を受けた後、シャル兄が実演するそうなのでオレもその様子を『眼』でじっくりと見て観察した。

シャル兄が最初に唱えたのは風を起こす初歩の初歩の風の系統魔法「ウインド」だ。

『眼』を通して見た光景は、杖の周りに輝く緑や白の粒が集まり詠唱の完成と共に粒達がぐるりと風のように辺りを巡る。

この『眼』は生まれてからずっと見えていたもので『粒』が何なのか俺には良く分からなかった。

ただ、魔法に関係があると言う事だけは三年という短い時間の中でも気がつく事だけは出来た。

騎士達の魔法の訓練で見た時の様に粒達は杖を巡り、集まりシャル

兄の周辺を舞う。
暫く輝く粒達が舞う様子に見とれていたときにシャル兄の声がかかった。

「さあ、ジョルジュ。やってみなさい」

オレは頷いて、シャル兄がやった時の様に風のイメージ、粒の流れをイメージして呪文を唱える。

杖に集まる粒の流れをハッキリと感じた時に今まで感じたことのない感覚を感じていた！

ハッキリとは解らないけれどそれは粒から感じた様に思えた。

この感覚は一体何なのだろうか？

その答えが出ないまま、オレはゆっくりと唱えていた魔法を完成させた。

ゴォ！

一瞬ではあるが、強い風が吹き粒を巻き上げながら空へ舞った。イメージとは違う魔法の流れから感じたのは何だったのだろう。正体を知りたいと言う好奇心のままにオレは目を閉じてもう一度呪文を唱える。

知りたい！

知りたいんだ！

この感覚を知りたい。

この感覚を伝えてくるものを知りたい。

教えて欲しい。

教えてくれ！

何度も何度も正体を知りたいと願い、思い杖へと願う。

杖へと願ううちに最初は漠然と。

でもそれが何なのか解って来るうちにあの感覚の正体が核心へと変わった。

意思だ。人間の様にハッキリと形を持っていないけど人間よりも細かく、大きな意思を感じた。

風の意味。

自分達は風の体現者。

風の精霊。

この時初めてオレの『眼』が何を見ているのかが理解できた。理解した瞬間にまた意思が伝わってくる。

それは歓喜。

やっと気が付いてくれたと。

ようやく伝える事ができたと喜んでいる。

オレは今まで知らなかった事が恥ずかしかった。

そして気がつかなかったオレに意思を伝えてくれることがとても嬉しかった。

そしてオレは願う。

力を貸してほしいと。

願いは精霊達に届き、より一層杖に集まる精霊達の数が増える。その様子を見たオレは、心が思うままに呪文を唱え終わる。

力強く、また優しく包んでくれる風が辺り一面へと巡る。

風が吹きやんだとき、オレはありがとうと伝える。

精霊達にそれが伝わると嬉しそうに輝いた。

「ジョルジュ？」

そう声がかかれずっと集中していたのか、周りの様子に気がついた。

周りでは驚いたシャル兄やジョゼ兄、護衛達の姿があった。

……何かやらかしてしまった？

ちよっと嫌な予感がして冷や汗が流れた気がした。

2話（前書き）

ストック書きためてから投稿すれば良かったと今更ながら公開。
プロットというか入学までの流れはあるんだけどねore

シャルルとジョゼフの性格がかなり原作と違う気がする。
シャルルが割とネガティブに、ジョゼフがはっちゃけた性格になっ
てるのは何故なんだろう。俺にもわかりません。

2話

シャルル視点

僕の弟、ジオルジュは変わった子だと思う。

最近1歳になったシャルロットに比べるとジオルジュはそこまで手はかからなかったと聞くけれど、良く泣いた様な気もする。

とはいえ、悪戯好きで変わった子ではあるけれどジオルジュは賢い子供だし僕たち兄弟によく着いて回ってニコニコと笑っている所を見ると嬉しくなってくる。

昔は僕達もこうやって笑い合っていたと。

だけど何時からだろうか、心の底から笑いあえなくなったのは。

魔法が使えない兄さんに変わって僕がガリアの王になり変わろうと思ったのは何時だろうか。

魔法が使えない兄さんだけどチェスも乗馬も剣も全て兄さんに叶わない事を知ったのは何時だろうか。

だけれどそれを認めたくない。兄さんに悔しさで歪む顔をみたい。

そう思い今まで魔法を血反吐を吐いて鍛えてきた。

ジオルジュに魔法を教えようと思ったのだって、優秀な所を周りに見せつけようと言う考えもあり名乗りを挙げた。

このことは受け入れられ、優しい兄という事を印象付ける事が出来たはずだった。

だけど……だけれど……、

ジオルジュに簡単な風の魔法を教えた時、その考えをあざ笑うかのようになんて吹きすさんだ。

初めて唱えた呪文は一瞬だけだけど強い風が起こる。

不完全だけれど初めてで此処まで魔法を使えるなんてさすが優秀な僕の弟だ！

そう思っていた僕の心は、虚栄心はもう一度となえられた呪文によ

って吹き飛ばされたのだ！

庭一面を巡る風には単なる風を起こす魔法では考えられないほどの規模と風に感じられる力が感じられた。

それを魔法を今日初めてという子供が使って見せたのだ。

その光景をまじまじと見せつけられたとき、一つの単語が頭をよぎる。

天才

この名は僕の血の滲むような努力によつて作られたものだ。

僕の魔法を見た人間達は「流石シャルル様」と褒め称えてくれる。

だけど、ジョルジュの魔法を見た時そんな思いがとてもちっぽけに感じられた。

ダメだ。

ダメなんだ！

兄さんに勝てない僕が唯一勝つことのできるモノが魔法なんだ！！
魔法の天才という名をジョルジュに取られたら一体何を誇れば良いんだ！

僕の今までを否定しないで！

ああ、ジョルジュ。

その場所はぼくの場所なんだ！

うばわないでくれ！

ジョルジュ！！

ジョゼフ視点

末弟ジオルジュは変な奴だ。

いきなり踊りだしたかと思えばその次はジオルジュの年齢では理解が出来ないと言っても良い本を理解して読んでいる。

チエスをやってみたいと言うので、期待してみればあっさりと負けて悔しがり、何度も勝負を挑んでは負け最後には泣いてしまいその後は俺が泣かしてしまったと言う事になる。

その後は申し訳なさそうに謝りに来たりと見ている分には動物がチヨコチヨコ動いているようで面白い。

ただ、割ととばっちりが俺に飛んでくるのはどうにかして欲しいものだな。

先日ジオルジュの奴が魔法を覚えるのだと嬉しそうに笑った時にぼろりと「俺のような無能になるな」とこぼした事があった。

それを聞いたジオルジュは俺の体をよじ登り、そのまま杖で頭を叩き説教された。

3歳児に説教される大人という図は俺の有って無い様な体裁が崩れそうで非常に困るのだがあの馬鹿はそんな事を気にもせず俺に諦めるなど何度も声をかけ続け、最終的には一緒に燃え上がるぞ！と暴走し始める。

いつものことと思い大人しく付き合ったものだが、これがなかなか楽しいものだった。

普段中傷を受ける俺の心は覚めきっていたものだが久々に心が燃え上がる。

その心のまま、久しくやっていなかった魔法を練習してみようと思いいジオルジュの魔法の練習の日に顔を出した。

ジオルジュの奴は俺に似ず、シャルルのように魔法の才能があるのか一度で風を起こしその次には更に大きな風を起こしたのだ。

並みのメイジでは不可能な風を起こすジオルジュの姿にシャルルの背中が見えた気がした。

一瞬見間違えそうになったが、そんなわけがないと俺は頭を振りシャルルの方を見た。

シャルルの奴もおどろいているだろう、そう思っていた俺の期待は裏切られた。

シャルルがジオルジュを睨んでいる。

違う、ジオルジュを見るシャルルの顔には見覚えがある。その顔を俺は知っている。

シャルルは直ぐに我を取り戻しジオルジュに声をかける。
いつものシャルルだ。

その様子を見て俺も落ちつく。

だが、シャルルがジオルジュにあの表情を向けるのか？
ありえない。

だが、今の光景を認めるしかない。

シャルルがジオルジュに嫉妬しているのだと。

そう認めた時に悔しさと、愉快さと、安心が混ざった様な感情が巻きあがる。

悔しいなあ、ああ悔しい。

全く、笑い話にもならないな。

あのシャルルが嫉妬しているなんて！

その顔を見る事ができただなんて！

そしてその顔を見せたのがジオルジュだなんて！

ああ、悔しいなあ。

その表情を自分が見せてみたかった。見せつけてやりたかった。だが、アイツも完璧ではないと言う事が解っただけでも少し心の底に淀んでいたものが晴れた気がする。

全く悪趣味な。

自分でそう自嘲するが、どうしてこんなに安心するのか全く不思議だ。

だが、シャルルともう少しだけ本音を交えてみたい。そんな事も考えていると自然と笑みが浮かんでいた。

ジョルジュ視点

精霊の力を借りて魔法で風を起こしたら周りから凄く見られている。す。

オレ、なんかやらかしちゃったのか？

そう思っていました。

「ジョルジュ。すごいじゃないか！」

そう言つてシャル兄がオレを抱っこして持ちあげて抱きしめた。褒められてちよつと嬉しい。

シャル兄は俺を下ろしてから聞いてきた。

「こんなにすごい風はトライアングルのメイジでも吹かせる事が出来る人はそうそういないよ！」

「どうやって呪文を唱えたんだい？」

ちよつと返答に困るのだけれど言つた方が良いのかなあ……でも粒（精霊）が見えますって言つても下手したら異端というレベルじゃないし……。

悩んでいるうちに黙り込んでしまったオレを見てシャル兄は言う。

「言えないのかい？」

「……（コクン）。家族だけでお話しさせて欲しいです」

「ここでは言えない事なのかい？」

「うん。オレもちよつと整理する時間が欲しいんだ」

「だけれど、皆に内緒と言うのは……「シャルル」…兄さん」

「お前の言いたいことは解るが、ジョルジュも困っているだろう。後で話し合おう」

「……解りました。では、また昼食の時にお願いします」

そう言つてシャル兄は去つていった。

序に周りの人達もシャル兄についていつて、ここに残ったのはオレとジョゼ兄だけ。

……あれ？魔法の練習は？

「そんな顔をしなくても呪文の詠唱くらいは教えてやる。あとは自力でなんとかしろ」

「むう」

色々と言句を言いたいけれどオレは渋々承諾した。

それでもジョゼ兄が先に手本を見せてくれるらしく「期待するなよ」

という言葉と共に火を点ける魔法の詠唱を唱え始めた。

杖に集まるのは赤やオレンジといった火を連想させる精霊達。

これが火の精霊なのだろうと結論付けてジョゼ兄の杖を見る。

するとどうだろう。

精霊が砕けて銀色のような靄になったではないか。

杖の先に集まった靄は詠唱が完成すると同時に弾けて、そこからまた精霊達が生まれた。

魔法は何も起こらない。

「フツ……やはり何も起こらぬか」

「違う。魔法は起こっていたよ」

「ジョルジュ？」

「うん……ジョゼ兄の魔法の事も一緒にお昼の後で話し合いたいけどいいかな？」

「構わぬがどうかしたのか？」

「ちよつとね」

あの靄は俺の思った通りのものならば理屈は通っている。

粒の粒。つまりは……虚無。

オレがジョゼ兄の属性を虚無だと知っているからこそ解るものだ。

あれはブリミルが記した粒の粒。

精霊達の根源なのだろう。

オレの眼が虚無を粒という形では無くても見れるのは始祖の血のおかげなのだろうか？

疑問は尽きないけれど、ただ解っている事が一つだけ。

「面倒が増えちゃったなあ……」

「何か言ったか？」

「べつにー」

ジョゼ兄に教わった簡単な呪文にいくつか成功させ、威力も大分絞れた時に丁度お昼になった。

静か過ぎる昼食が終わり王族のプライベートルームに家族全員が集まる事になった。

とはいえ、兄さん二人の奥さんとイザベラとシャルロットは来てはいない。

この場に居るのはお父さんとお母さん。ジョゼ兄にシャル兄、そし

てオレの5人だけだ。

少し重い空気の中、オレは自分の『眼』と眼を通して映すモノについて話し始めた。

「オレの魔法についてだけど、ものごころが着いたときから見えていたものがあるんだ。

それは小さくても強く輝く粒。生まれた時からずっとその粒が見えていたんだ。

そして、その粒がメイジ達が魔法を使う時に魔法に合わせて集まって魔法になるという様子も見えてきた」

「今日までこの粒の事は解らなかったけれど杖を持って呪文を口にしたときに粒から感じる意思が伝わってきた。

オレはその意思が何なのかを知りたくてもう一度強く粒の意思を感じ取ろうとした時に粒の正体を知る事が出来た」

「……して、その正体とは？」

「何処にでも居て、メイジ達が恐れていて、そしてメイジ達が気がつくことのなかった存在。

始祖ブリミルが粒と云い現わした存在。粒の正体は精霊です」

言いきった時にやっぱりというかジョゼ兄を除いた3人の顔が険しくなった。

だけれどもう少しだけ付き合って欲しい。

「系統魔法とは粒を操る魔法。即ち精霊をメイジの意思によって制御し、その力を行使する魔法です。

事実、オレは精霊に力を貸してほしいと願い系統魔法による風の魔法を起こしました」

「だが、それが易々と信じられるものではないと解っておるな」

お父さんが低く強い威厳を感じさせる声で言ってくる。

「うん。先住の力、先住魔法も精霊の力を使う魔法だから同一視することはブリミル教の教えからは異端だね」

「それが解っておきながら何故系統魔法が精霊の力だと言うのだ？」

「…オレは今まで見てこなかった友達を紹介したかったんだ」

「友達だと？」

「うん。オレが渡せるものなんて無いのにオレの願いを聞いてくれたり、オレに力を貸してくれる精霊をオレは友達だと思ってる。

だから信じて貰えなくてもお父さん達に教えたかった。話すなら本当の事を伝えたいと思った。ただそれだけだよ」

オレが良い終わるとお父さんが深く息を吐いて、さつきとは打って変わって優しい声で言った。

「ジョルジュの言いたいことは解った。お前が真剣なときに嘘なんてつかないだろう。本当に精霊と信じることは出来ないが、お前の言うとおりに魔法に強く関わる何かがあるのかもしれない。でもそれは他のものに知られてはいけない事は解っておるな？」

オレはもちろんだと頷く。

流石にこの話題を信用できる人以外には話したくはない。

異端認定とかされても正直迷惑以外の何物でもないからだ。

「ならば良し。この話題は家族の者以外には話す事は禁止だ。他のものも解っておるな？」

お父さんの言葉に皆は頷いた。

ただ、もう一つのこれまた大きな話題があるのだけれどこれも話さないといけないだろう。

「それともうひとつ、話したい事があるんだ」

この言葉にお父さん達はまだあるのかという表情をしたけど。
うん、まだなんだ。

「今日、ジョゼ兄の魔法を見て知った事があります。
ジョゼ兄は魔法が使えない理由。それがオレの眼で見えたんです」

その言葉にまた皆が険しい顔をする。

「通常のメイジが呪文を唱えると粒達が集まって形となって魔法となります。でもジョゼ兄の場合、集まった粒が砕けて靄になるんです。」

その靄が呪文が完成した時に弾けてまた粒に戻るんです。この現象の所為でジョゼ兄は魔法が使えないんだと思うんだ」

粒が砕けてということ、お父さんも少し思い当たる事があるみたいで確認するような口調で訪ねてくる。

「その事からジョルジュ、お前は何を想像した？」

「……言っても良いの？」

「言う為に話したのだろう」

「はい。では改めて。兄、ジョゼフが系統魔法を使えない理由。それは虚無の系統からではないかとオレは推測します」

「ちょっと待て、ありえないだろう！」

ジョゼ兄が席を立ち、そう言った。

一応原作知識と照らし合わせた根拠もあるのでそれを言う。

「一つはジョゼ兄が始祖から続く血を受け継ぐの人間の一人であること。」

「一つは始祖は粒の更なる粒を操ったとされること。」

「一つは系統魔法が使えないにも関わらず、杖の契約を行え、ディテクトマジックによる診断でもメイジだと言う事」

「一つはこれらの点から推測されるのはジョゼ兄が系統魔法を使えないのは土水火風いずれの系統にも当てはまらない、失われたペンタゴン最後の一角ということです」

「だが、虚無の系統は既に失われておる。虚無の証明はどうするのだ？」

「王家に伝わる始祖の秘宝。それをジョゼ兄に使わせてみるのはどうでしょうか？」

マジックアイテムとしての効果が不明の国宝ですが、もし虚無の系統に関するものならば虚無の系統の可能性が高いジョゼ兄につかわせてみれば何かわかるかも」

オレの推測に納得したのか、お父さんはこう言った。

「成程。確かにジョルジュの考えには一理あるだろう。今夜その真偽を確認する為にもう一度この部屋に集まって欲しい。皆も良いな」
「……父上、もし兄上が虚無の担い手ならば兄上はどうなるのでしょうか？」

「シャルル。聡明なお前のことだ、もう解っておるだろう。私は虚無の復活などと大々的に宣伝する気はないが、始祖に選ばれた者が王位に就く。それが正しい在り方だ」

「しかし……」

「全ては夜に解るだろう。この場は一時解散とする！」

そう締めくくってお父さんとお母さんは部屋から出ていった。

ジョゼ兄も部屋から出て、オレはシャル兄に声をかけようと思った

けれども何も言えずに部屋をでる。
シャル兄だけになった部屋で兄さんが何を思ったのか知ることとは出来なかった。

3話

オレは庭に戻って魔法の練習を始めた。

土を盛り上げる呪文。

水を操る呪文。

風を吹かせる呪文。

火を起こす呪文。

それぞれの魔法の呪文を唱えてみたところ、自分に一番しっくりきた系統は火ではないのかと思う。

勿論、最初に唱えた風の相性も良いけれど、火の相性はなんというか感覚的な表現ではあるが、もっと近い所にある気がした。

とはいえ、そもそも3歳の子供がドットレベルで最も初歩の初歩という呪文を全部の系統で操れるっていうのは異常らしい。ってジョゼ兄が言っていた。

勿論、こう云う事の出来る理由は精霊の力を借りる事が出来ているからなんだけれどね。

とはいえ、優れたメイジの素養を持っていたとしても王族のオレが戦闘だのなんだと何か出来るわけでもないし、精々が宴会芸として使えるくらいなんだよなあ。

そう思うとちよつとやる気が無くなってきた。

思いつきりぶつ放してみたい。

こんなトリガーでハッピーな思考も浮上するが、ちよつとどころではない規模で不味い気がしたので誘惑を振り切るように頬をペチンと叩く。

うしっ！再開だ。

基本はある程度覚えたので、もう少し高度な魔法に挑戦してみよう。とはいっても今唱えたのが初歩の初歩ならばこれからののは初歩の魔法だ。

『ファイアー・ボール』と『エア・ハンマー』。

この二つの魔法を使ってみようと思うが、人に当たらないようにしないといけないだろう。

なので、オレの近くで見えていた護衛衛士に周りに人が居ないか、居たら特別な用事が無い限りは近付かないようにと回るようにと指示を出した。

暫く待った所で衛士が返って来て問題は無しということなので早速呪文を唱えた。

杖を持ち、精霊へ力の助力を願い、ルーンを唱える。

そして…

「……ファイアー・ボール！」

言葉と共に生み出された火球は真っ直ぐに飛び、草の無い剥き出しの地面目掛けて落ちる。

着弾と同時に炎が炸裂し、衝撃音と共に燃え散って行った。

初めてにしては上出来なのかな？

そう思っただけでも比較する対象や出来を教えてください人間は居ないからどうしようもない。

気を取り直して次は『エア・ハンマー』に挑戦してみよう。

さっきと同じように、ささやき、いのり、ねんじろ！……ではなく。

精霊達に願い、ルーンを唱え、その力を解放する！

「ラナ・デル・ウィンデ！ 『エア・ハンマー！』」

解放されたスペルが、精霊が一つに固まり、圧縮された空気となる。その空気の鎚が孤を描いて焦げ跡の残った地面を目印に叩き込まれた。

叩き込まれると同時に土煙が巻き上げられ、強い振動が足に伝わり、音が弾け飛ぶ。

煙が晴れると、土を抉った跡が残された。

これ人に撃つたらミンチっていうレベルじゃないよね……？
そんな考えが脳裏を掠め、ちよつと冷や汗が流れた。

「あ、あの、ジオルジュ殿下。この跡は一体……？」

ふと声をかけられ、振り向くと騎士の格好をした人間が立っていた。おお。ちよつとびっくりして後ろに下がってしまったぜ。どうやら、魔法の様子で少し騒ぎになってしまったようだ。隠す事でもないの、正直に話そうと思う。

「エア・ハンマーの魔法を練習していたのだけれど、練習する場所が悪かった？」

「い、いえ！ ですが、エア・ハンマーなんてライン・スペルを本当にお使いになられたのですか！？」

「……ライン・スペル？ ドット・スペルじゃないの？」

え、ちよつとまって。

エア・ハンマーってドット・スペルじゃねーの？

「違います！ エア・ハンマーは『風』と『風』を二乗したライン・

スペルですよ！」

「なにそれこわい」

「怖いって……。いえ、失礼しました！ エア・ハンマーは正真正銘のライン・スペルなのですが、本当に使えたのかをもう一度使って頂けませんでしょうか？ 私は風のスクウェアのメイジですのでそれがエア・ハンマーなのか判断も出来ますから。」

「ああ……。うん。わかったよ。」

ライン・スペルってまじかよ！ と軽く混乱していたオレだけど、もう既に引き返せないような状態に入っている事だけは理解できた。どうにでもなれと深呼吸をして、空気を入れ替えると同時に精神を切り替える。

「『エア・ハンマー』！」

スペルを唱え、先ほどと同じような空気の塊が土を抉る。それを見た騎士が口をパクパクとさせながらも、オレが見ている事に気が付いて佇まいを戻す。

「で、殿下。そのお歳でもう既にライン・スペルをお使いになれるとは流石です……。何時から練習されていたのでしょうか？」

「今日からですが。」

空気が凍るってのはこういう事を言うんだね。と頭の片隅でそう思った。

「ち……」

「ち？」

「ちくしょおおおお！！ 俺がどれだけ苦労してスクウェアになったって言うんだあああ！！ 血か！ 才能か！ 最初からラインクラスだって！ ちくしょおおおお！！」

明らかに王族への暴言ではあるが、オレの所為なのでどうしようもない。

誰かに見られたらオレの所為なので責を与えないようにと取り成すしかないだろうな。

騎士の精神が魂の叫びから帰還して、自分が何を言ったのかと言う事に気が付き慌てて謝罪を言い始める。

「も、もうし訳御座いませんでした！ 殿下に向かってなんという暴言を！ この責任は私だけに！！」

「あー……いや。オレも気にしていないから別に良いよ。ただ、これからは気をつけてね。」

「そういう訳には参りません！ 責が無いなどと、王族に向かっての暴言を何も無しに許して戴くなんて事はできません！」

3歳児に罰をどうか私に！と聞くとちょっと性癖が怪しい人に見えるけれど、それはオレの頭がおかしいからで相手はごく普通に言っているのだろつ。

流石に不意にはいえ王族の前で王族の暴言を吐いて何も無しと言うのはオレが舐められ、王家が舐められるというように解釈されるのかもしれない。

そう考えると確かに罰を与えないといけないのだろう。
どうしようかなあ……。

というか、周りに人が集まってるし……。

あー、うん。

しょうがないよね。

「ならば、ジオルジュの名のもとに罰を与える。お前の名前は？」

王族らしくにオレは問うた。

実際はちよつと舌が足りないところがあるので、威厳は何も無い感じではあるが。まあいい。

「東薔薇騎士団所属。エルネスト・シャペルでございます。」

「エルネスト。顔を出せ。」

「は、はっ！」

騎士、エルネストが顔をオレの前に出した。

そして出された顔の頬を俺が叩く。

幼児の力しか無いので痛くもなんともないが、一応罰という形ではあるだろう。

「たしか風のスクウェアだったな？」

「は、はいっ！」

「なら暫くオレに風の魔法を教える事。頬を叩いた事と、これを罰とし、オレはお前を許す！」

「寛大な処遇！ 殿下、ありがとうございます！」

エルネストは跪き、頭を垂れる。

「これにてこの件は解決とする！ 周りの者は各自の仕事に戻れ！」

そう言うと、慌てた様に何事かと見ていた周りの人間が仕事へ戻る為に立ち去って行く。

エルネストもオレに何度もお礼を言ってきた、仕事に戻りますと最敬礼をして立ち去って行った。

誰も居なくなつた庭で空を眺めみると、エア・ハンマーのスペルを教えたジョゼ兄が爽やかな笑顔でサムズアップしている様子を幻視したので、ムカついて空に向かってエア・ハンマーを唱えた。

当り前ではあるが、手応えが無かつたので後で本物を殴ろうと思いオレも庭から出ていった。

ちなみに、この件で流石にエルネストがあゝの罪で許すのはどうかという事で騎士団から自主退団する事になり、

オレの風の魔法の教師兼、護衛兼、従者となる事となった。

3役をこなすと言う事で給料が騎士団の2倍になったらしく本人には不満が無く。

騎士団除名という不名誉はあれど、恩賞とも言つて良い処遇に感動し、オレと王家への末代までの忠誠を誓うと杖を捧げたのだつた。

これが後の『忠犬』のエルネスト（本人は最期まで『忠献』と言い張っていたが。）の誕生となつたのは余談ではある。

あの後、ジョゼ兄を探して城内を巡っていたが、オレの行動を察したのか夜になるまで見つける事が出来ず。

夕飯時に発見し、殴ろうと飛びかかりお父さんからレビテーションで縛られ、お母さんとツインで叱られることとなった。

ジョゼ兄はそれをニヤニヤしながらワインを飲んでおり、後からやってきたシャル兄も何事かと眼を丸くし、事情をジョゼ兄から聞くと笑い始めた。

ちくしょおおおおおお！！！！（泣）

説教が終わり、あらためて始祖への祈りを捧げた後に夕飯を食べはじめ、ジョゼ兄が魔法の練習はどうだったんだとまだニヤニヤしながら聞いてきた。

お父さんたちもどうだったんだと聞いてきたので、何時か青髭筆り取ると心に決めつつも答えた。

お父さん達はライン・スペルが使えたと言う事で驚くも直ぐに落ち着きを取り戻し、自らの才能に溺れてはいけないぞという言葉を送った。

締め流石ジョルジュだと褒めてくれて、ジョゼ兄もジョルジュだからと言ってくれた。シャル兄も流石僕達の弟だと言ってくれた。とりあえずジョゼ兄には、お前の所為だコンニャローと眼線を送っておいた。

「フッ…」

「ハッ！」

どちらがどちらなのかは言わなくても解ると思う。

そんな王家の食卓にしては騒がしいひと時を過ごした。

夕食の後。昼と同じく、王族専用のプライベートルームに集まった

5人はソファに座り、言葉を待つ。

「さて、始祖から続く秘宝。『始祖の香炉』だ。王にしか持てぬ秘宝ではあるが、実際に香炉として使っても何も匂いがしないものではあるが……。ジョゼフよ使ってみなさい。」

お父さんから香炉を受け取り、ジョゼ兄は火をつけるがジョゼ兄も何も臭わないと首を振る。

「うつむ……。どういうことか。何もわからぬとは。」

「お父さん。確かもう一つ秘宝がありますよね。確か『土のルビー』だったかと。」

オレはお父さんの指に輝く茶色い宝石の指輪を指す。

「……ふむ？ 確かにこの二つは同じ時から存在するものだ。ジョゼフ。これを嵌めてもう一度試しなさい。」

渡された『土のルビー』を指に嵌め、怪訝な顔をしながらも、もう一度使おうと香炉へ触れる。
触れたその瞬間にジョゼ兄の顔が変わった。

「……なんだと？」

「ジョゼフよ。どうした？」

「香炉から香りが漂ってきました。そしてその匂いを嗅ぐと言葉が浮かんでくるのです。」

「……香りだと！？ 何も匂わぬが。」

「兄上、言葉とは？」

ジョゼ兄は言う。

この香炉が虚無の系統を持つ者にしか扱えない事。

悪用されたり、盗まれたりする事を防ぐために虚無の担い手でも土のルビーを着けていないと決して触れても香炉は使えない事。

そして、虚無のスペルを知ったと言う事をブリミルの名と共に教えられた。

何か足りない気もするが、ジョゼ兄が何かを考えているのだろうと思ひ何も聞かない事にした。

そして、虚無のスペルが使えるのかと試す事になった。

ジョゼ兄が覚えたのは『アクセラレーション（加速）』と『エクスプロージョン（爆発）』の魔法。

自分が消費するのは精神力だけという、自分だけが加速し、全ての時間が止まったような世界の中を自由に動けると言う、これなんてスタープラチナ。あるいは、とら八的『神速』なの？ っていうチートスペル。

いや、アクセラレーションだから、口笛と荒野の世界の渡り鳥の剣士や銃士とか、対テロ戦隊の変身ヒーローとか、シェイプシスターな赤毛の少年だろう。

『世界』は時間そのものを止めているので除外。

ジョゼ兄がルーンを唱えると、精霊達が砕け霞となる。

その霞がジョゼ兄を覆い始め……と言う所でジョゼ兄の姿が消えた。それと同時にドスンと尻もちをついた。痛い。

気がつけばオレが座っていたソファが消えていた。

周りを見ればニヤニヤと笑うジョゼ兄。

そう か お 前 か 。

お父さんとお母さんは何が起こったのか、ビックリして声が出ない様で、シャル兄はポルナレフになっていた。

「ジョゼ兄イ……」

「フッフ…『加速』の魔法でお前の位置を動かしたただけだが、こうも面白い事になるとは。非常に愉快だ。」

HAHAHAHAHAHAHAHAと笑うクソ兄貴の顔をぶん殴ろう。そうしようと飛びかかるが、あっさりとかわされた拳句に、落ちない様に掴まえられた。非常に屈辱である。

いち早く平静を取り戻したお父さんから、大人しくしなさいと叱られた。畜生。

「そうか、ジョゼフが虚無の担い手か……。」

仕切りなおした空気の中でお父さんが重たく息を吐く。

その重たい空気の中、誰も彼も沈黙を守っていた。

「おめでとう。兄さん。正当な王権は兄さんにあるんだ。」

そんな中、シャル兄がジョゼ兄を祝福する。

ちよっとは空気読めよと言いたいけれど、整った笑顔が酷く歪んでいる気がした。

ジョゼ兄は何も言わなかったけれど、その様子に気がついたオレはシャル兄へ言った。

「シャル兄。悔しいの？」

「…ジョルジュ。何を言っているんだい？ 序列からしても兄さんが正しい王なんだよ？」

「でも、オレだったらこんなとき絶対に悔しいと思う。だからシャル兄だって絶対に悔しいって気持ちになると思う！」

「ジョルジュ、僕は違うと言っているよ。なのに何故そう言う事を言うんだ。」

「だったら、その手は何だよ！」

オレはシャル兄の手を指す。

硬く握られた手からは血が流れ、滴となって落ちていた。

「っ！？ こ、これは！ 違う…違うんだ！」

自分でも気がつくことは無く、シャル兄は閉じられた手を開こうとするが指は開かなかった。

両親やジョゼ兄も初めて見るシャル兄の様子に驚き、何も言えなかったが。

「そんな様子で悔しくないなんて嘘だ！」

オレはそう言った。

シャル兄はそれを聞いて、顔をくしゃくしゃに歪める。

泣いているのか、怒っているのかは解らない。

シャル兄はゆつくりと頭を下げてソファに座る。

表情は見えない。

でも、シャル兄の悔しさ、悲しさがぼつりぼつりと聞こえてくる。

「……………そうだ。」

…そうだよ。

……僕は……僕が…ガリアの王になりたかった……。

兄さんが無能と言われる中、僕が褒め称えられた。

僕がこの国の王となることが相応しいと言われた時、僕自身もその通りだと思った。

でも、兄さんと過ごすうちにそんな事が幻想だと気がついた。

チェスだって、乗馬だって、勉強だって何時だって兄さんは僕の先に行く。

僕が勝てるのは魔法だけだと気がついた時、僕は絶望した。

でも、認めたくない一心で僕は魔法を鍛え上げ、スクウェアとなった。

周りの者は天才だと、ハルケギニア最高の才だと祝福してくれた。

だけど、ただけだ。

それでも兄さんは負けを認めなかった。

スクウェアになっても兄さんは悔しがることは無かった。

僕はそんな兄さんが悔しさでに歪む顔を見たいと、更に自分を鍛え上げた。

最高の風の使い手と言われ、称賛を浴びても僕が勝つことは無かった。

そして魔法が使えない兄さんは虚無の担い手だった。

兄さんが虚無なら僕は今まで何をしてきたんだ？

僕がしてきたのは無駄だった？

なんで…。

なんで兄さんが…。

兄さんがドットでも、僕がドットしか使えなかったらこんな悔しい想いはしなかった。

どうして……。

どうしてなんだ…。」

ずっと溜めこんだ想いが堰を切って流れるように、シャル兄の言葉が止まる気配が無い。

そんな時、ジョゼ兄がシャル兄の肩を抱き言った。

「俺もだ。俺は、お前が魔法を使える事を羨んでいた。妬ましかった。」

魔法が使えない自分が悔しいと思っていたんだ。

だが、そんな感情をお前に知られたくは無い一心ですつと眼を逸らし続けていた。

悔しいと気が付きたく無くて、それ以外に打ち込んだ。

だが、誰も俺を見ない。見てくれない。

魔法が使えないだけの俺と違って、魔法が使えるお前は誰からも愛されている。

それが悔しかった。憎かった。

羨ましかった。

だが、お前は……お前も苦しんで居たんだ……。

苦しかったんだ……。

今なら、今なら素直に言える。

シャルル。お前に勝てなくてオレはずつと悔しかったと。」

「にい……さん。」

「俺が虚無だというのなら、お前との決着が着くことは無かった。

お前との勝負。

お前に勝つ事も、負ける事も出来ないのが悔しい。

お前はどうかんだ。シャルル。」

「僕も……僕だって悔しいさ。

もう、魔法で兄さんの悔しい顔も見れないなんて悔しいに決まっているさ！」

お互いに涙を流し、何年も何十年も合わさる事の無かった本心が繋がっているのを見て、俺ももらい泣きそうになった。
兄さんたちが心を繋げるという様子。

『原作』に無い光景。既に『原作』から離れた姿。

オレがオレの為に壊したこの流れ。

だけれど、二人を見ていると自己満足とわかっていても嬉しくて、泣かないと決めた両目から涙が溢れてきた。

「で、だ。」

ん？

「ジョルジュ、お前は何者だ？」

一難去つて、また一難。

そんな言葉が奔る。ぶっちゃけありえない。

「まあ、俺達の弟なのは今更だ。

ジョルジュだからという言葉で片付けても良いのかもしれない。だが、お前はあまりに賢すぎる。知りすぎている。

お前は何を知っているか教えろ。むしろ、キリキリと吐け。」

もうどうにでもなれ

四面楚歌。

そんな言葉が浮かんだオレに逃げ場は無かった。

3 話（後書き）

前半が予定に無かった流れになってしまい、後半との空気の違いが
凄い。

でもラストの緊張感が無いの作者のヌクモリティ。

4話（前書き）

書きはじめたら一気に出来あがった今回のお話。
後半一気に雰囲気が変わってしまいました。

もう少し情景を描写出来るようになりたいです。

9月14日修正加筆。

4 話

真っ白に燃え付きました。ジオルジュです。
あれから洗いざらいぶちまけました。

自分が生まれ変わりを経験したということ。

前世がハルケギニアよりも高度な技術と文明をもった世界だということ。

その世界に「ゼロの使い魔」という物語があり、この世界ハルケギニアを舞台にした話だと言う事。

その話に自分という存在が居ない事。

10年後辺りにお父さんが倒れると言う事。

その時にお父さんから次の王にジョゼ兄が指名される事。

シャル兄がやつぱり悔しさを隠してジョゼ兄を祝福し、疑心暗鬼となったジョゼ兄がシャル兄を暗殺する事。

正氣に戻ったジョゼ兄がその事に絶望して心が壊れた事。

壊れた心の衝動の赴くままに全てを壊そうとする狂王となってしまう事。

それによりガリアが割れる事。

最終的に、ロマリアの聖戦の発動とシャルロットを旗頭にした軍によりジョゼ兄が討たれ、シャルロットがガリアの王になったと言う事。

また、ロマリアの本当の目的がシャルロットの双子の妹でジョゼツトと名付けられた少女とすり替え、聖地へ続く聖戦を支持させる事。

「ゼロの使い魔」の大筋と、ガリアに関係することを全部告白しましたとさ。

序に、地下1000メートル以下に風石が溜まりまくってハルケギニアがアルビオンに！ ということも話した。

最初は懐疑的に見ていたけれど、あまりに具体的な話だということと、シャルロットの双子という話が出た時にシャル兄が何故知っているんだと言った事により一応は信じて貰えた。

大隆起については皆して頭を抱えることになりました。

「それで、その後はどうなるんだ？」

「細かい所は省くけれど、聖地へ向かう事になった主人公。待て、次回！！」

「……肝心な所がごっそり抜けているな。」

「そもそも、オレが存在する事で『原作』を正伝とするならこの世界は異典、外典と成ったと言ってもいいし。

前半の山場とも言えるガリア関係が一気に解決しちゃったからなあ。正直、オレはどうすればいいのかサッパリです。」

「肝心な所で使えん奴め。」

「本当だから反論できませんです。」

でも、オレのハートはボロボロだ！

「まあ、お前が何故知っているのか、賢すぎるのかが解った。」

「うん。」

「なんといつか、驚くべき所は幾つかあったがな。」

お前と、お前の持つ知識は確かに異端過ぎる。それを再認識した。」

「うん……。」

「兄さん……。」

流石にオレは受け入れられないのだろうか。
そう思うと心が軋む。

「ジョゼフよ、そう苛めるでない。」

「そうですね、父上。」

それに、さっきも言っただろう。

お前が何であろうとお前は俺達の大事かは不明だが弟で、父上達の
息子なのだからな。」

「その通りだ。ジョルジュよ、お前がお前として生まれたのは不幸
なのかもしれないし、幸福なのかも知れない。」

だが、お前が何者であろうと私たちの大事な息子で有る事には変わりが無い。

それにだ、私はお前に感謝しているのだよ。

ジョゼフとシャルル。私はどちらを王にするか常々悩んでいた。

その答えを示し、また二人の違えていた心を繋げた事。

私はそれを嬉しく思うよ。」

お父さん…。

「そうです。あなたは変わった子だと思っていましたが、それでもわたし達の子だと言う事には変わりありません。

あなた自身、今まで黙っていた重荷に耐えていた事。母として支えることが出来なかった事を悲しく思います。

ですが、これからはわたし達が生きている限りあなたを支えましょう。

そして、あなたもわたし達を支えてほしい。家族なのですからね。」

お母さん……。

「家族か。

……僕は今まで何をして来たんだろうね。

兄さんを妬み、娘を捨てて……。もう一人を二人分愛そうなんて酷い親だ。

親として、家族として最低な僕だけどこれだけは言える。

ジョルジュ。きみは僕の、僕達の家族だと。」

シャル兄い…。

「三度目だが、お前は俺とシャルルの弟で、俺達の家族だ。

まあ、お前が変人なのは今さらだろうし、今更だが生まれ変わりや

未来の知識を持っているなんぞジオルジュだからしょうがないでという話でしかない。

お前が何者であろうが、お前で遊ぶには関係の無い事だ。」

ジョゼ兄……。

俺でって、なんだよ。俺『で』って。

「だからだ、その、なんだ……。涙を拭け。顔が酷い事になっていくぞ。」

「ふあい……。」

ジョゼ兄からハンカチを貰って顔を拭っても涙が止まらない。

涙を止めるにはしばしの時間がかかった。

涙が止まったあと、ジョゼ兄にハンカチを返そうとしたけれど、いらんと言われた。ちょっと泣いた。

「さて、ジョゼフよ。

来年の降臨祭が終わって直ぐにお前に王位を譲るつもりだからそのつもりで居れ。

そして、シャルルは宰相としてジョゼフを支えるように。

ジオルジュは特に決めていないから二人に迷惑をかけないようにしなさい。」

「父上！？」

「なに、元々どちらかを王位と決めたら直ぐに譲るつもりだったのだ。」

それがジョルジュの知識では最期の時まで伸ばすこととなったようだがな。

私ももう老いた。この先のガリアを動かそうと言う力も無い。だが、若いお前たちならばジョルジュの言う14年の猶予を私よりも有効に使えるだろう。それをお前達で生かしなさい。」

「わかりました。父上の冠、一年後に必ず譲り受けましょう。」

ジョゼ兄がお父さんにそう言って頭を下げた。

「さて、もう夜も遅い。解散し、休みなさい。明日から忙しくなるであろうしな。」

お父さんはそう締めくくった。

お父さん達と別れたオレ達三人は同じ方向にある寝室へ向かいながら話をしていた。

無論聞かれない話でもあったのでサイレントをかけて。

「……全く。ジョルジュの言う事には驚かされたばかりだったよ。」

苦笑しながらシャル兄は言った。

少し窺うように俺は聞いていたけどシャル兄はそれを見て苦笑する。

「確かに驚いたけれど、ジョルジュはジョルジュに変わりないさ。ただ一つだけ聞きたい事があるんだ。」

「聞きたい事？」

何の事かと首をかしげる。

「ジョルジュは自分の無事の為に僕達の仲を取り持とうとした。でも他にもやりようがあったんじゃないかってね。」

「えっ……？」

「例えば、僕達のどちらかの肩を持ってどちらかを切り捨てる。これも宮廷では一つの方法だ。」

それともう一つ。僕達二人を消して自分が王となる。こういう手段もありといえはありだ。

王族は多かれ少なかれ敵が居るしその地位を狙う者だっている。ジョルジュは何故僕達の仲を取り持とうとしたのかってね。」

シャル兄の問いに俺は思い返す。

確かに割と簡単に行く方法はあったのかもしれない。

でも俺は二人と仲良くして欲しかった。

だって……だって……ああ。そうか。そうだったんだ。

「嫌なんだ。」

「嫌？」

そう。嫌だ。

簡単な答え。

「物語でも良くあることだけど。仲が良かった兄弟が争う話なんて良くあると思う。」

そして兄弟が引き離されたり、誤解し合ったり、憎み合ったり。

物語の最後は和解して絆を取り戻すっていうのもあるけれど。

どちらかを失ったりしてその絆に気づく。その悲しみが嫌なんだ。

哀れで、悔しくて、悲しくて嫌なんだ……。

だからオレは二人が争うのが嫌だった。

どちらかを失う結果が嫌だった。

二人に心の底から笑いあって欲しかった。

だから……だから……。」

オレは溢れる涙を止める事が出来ない。

二人が居なくなるなんて考えると心が苦しいから。

「ジョルジュ……ありがとう。」

撫でてくれる手が暖かくて嬉しくて、いっぱい泣いたのにまた涙が出そうだった。

ジョゼ兄は何も言わなかったけど暖かな眼で見ていてくれた。

「うー……。」

自分の心に渦巻いていたものが晴れたのかこっくりこっくりと波打つように眠気がやってくる。

今まで見ていたジョゼ兄はその様子に気が付いて眠いのかと聞いてきた。

「眠たいのか？」

「うん……。」

「なら俺の背中に乗れ。送ってやる。」

その言葉に甘えて俺はジョゼ兄の大きな背中に乗る。

背中から伝わる振動が心地よくて、俺はゆっくりと夢の世界に旅立

っていった。

「……全く。大した奴、大人びた奴と思えばコイツはまだ子供だったな。」

「……そうだね。僕達はそれに甘えていたのかも。……兄さん。」

「なんだ？」

「娘を……ジョゼットを取り戻しに行きます。僕の勝手に捨ててしまったあの子を。」

「そうか。ならば後は任せておけ。」

「ご迷惑……掛けます。」

「馬鹿が。こう言う時に迷惑なんて関係が無いだろうが。」

「……そうだね。」

「俺もお前と、お前達と別れるのは『嫌だ』な。」

「僕も『嫌です』よ。兄さん。」

あの日から数日もしないうちにジョゼ兄が正式にガリアの国王として指名されたのだった。

それと同時にシャル兄が次期宰相として任じられる事も発表された。この発表に驚く者たちが多く、中には「陛下は乱心なされた。」などという噂が侍従達の話から伝わってくるくらいで、

聞いた時はムカついたけど、ジョゼ兄は気にするなって言っていたのでオレも何も言わないでおく事にした。

シャル兄はあの日の後何処かへ旅立っていったようで、ジョゼ兄は何処へ行ったのか知っているみたいだ。

そんな困惑と喧噪に満ちたヴェルサルテイルで関係なくオレはのんびりと最近の日課になりつつあった魔法の訓練を行っていた。

「『エイミング・ウインド』!!」

呼び声と共に放たれた風の魔弾が的へ幾度も喰らいつく。

その姿はさながら姿無き獵犬いったところか。

発動した魔法をじっくりとみていた元騎士の従者兼今は教師役のエルネストは今の魔法に対する評価を言う。

「少々威力が低いですね。それに風の魔法にしては速さが遅いです。発想は面白いとは思いますが、やはりトライアングルは無いと厳しくはありませんか？」

「うーん……でも始めたばかりだよ？ 威力は低いのは解ってるさ。威力ももちろん考えるけど一番の目的としたいのはやっぱり速さと正確さ、そして数かなあ……。」

「つまりは誘導性能と連射性能を上げたアレンジ魔法ですか。面白い発想ですね私もやってみましょう…『エイミング・ウインド』!」

エルネストが唱えた風の牙は的に喰らいつついて的を蜂の巣のようにいくつもの穴を空けた。

流石スクウェア。やっぱり騎士団に選ばれていただけの事はあるんだなあ。

「ふむふむ。改める余地はありますが生物相手では便利になる技だとおもいますね。特に相手を狙うという部分は味方に当てないと言う利点も出てきますし。」

ただ、やはり改善点は風の矢の威力とスピードですね。この辺りを

クリアしないと疾さが特徴の風魔法とは言い難いですし。

やはりここは風の矢の形状の改良を加えた方が良くもありません。風系統はただ固めて撃つだけじゃ威力がでにくいですから。」

エルネストはそう論じてくれた。

手を加えるならば風の矢の部分かあ。

矢……矢……^ヤ……じゃあ……ん……。

つと、ずれてるずれてる。

なんで嬌声になってるんだよ意味わかんねえよ。

しかし、風の魔法ってさただ撃つだけじゃダメなんだよねー。

今の所エア・スピアーの様に先端が鋭い空気の杭をイメージしているけど、直射線上に打ち出すエア・スピアーに比べて誘導弾に近いエイミング・ウィンドは威力がかなり落ちているみたいだし……。

とはいってもエア・ハンマーみたいに大きくして威力を出すにしても普通にエア・ハンマーを打ち出した方が早いしなあ……。

既存の魔法に手を加えただけのアレンジ魔法とはいっても奥が深いもんだ。

まあ、直ぐに必要なってわけじゃないし。じっくり考えよう。

「そうだね。とりあえず、風ならシャル兄……シャル兄様なら詳しいと思うし聞いてみる事にするよ。」

言い換えたのはお父さ……父様から「お前もそろそろ王族として表に立つのだから出来るだけ相応しい言葉づかいをしなさい。」という言葉をもらったからだ。

たしかに公式の場とかで「ジョゼにいゝ」とか言えないしね。

「教師役というのにお役にたてず申し訳ありません。」

エルネストは申し訳なさそうに言うけれど、正直俺一人だけだとど

うすればいいかわからないし出来たとしても中途半端な出来になると思う。だから一緒にいてくれるエルネストの存在はとても嬉しい。

「そんなことないよ。エルネストは「王子!」…え?」

エルネストにお礼を言おうとした時、エルネストがオレに覆いかぶさってきた。

それと同時に爆音と衝撃が響く。

「何者だ!」

覆いかぶさったエルネストが陽の当たらない影に向かって吠える。隙間から見えたのは杖を持ち黒い装束に身を包んだメイジだった。その姿にオレは直ぐに正体を思い浮かべる。

暗殺者

こんな白昼堂々と襲撃を仕掛けてくるなんて何処の馬鹿だと内心憤慨しているが、

突然降りかかった殺意に自分の身は縮こまって震えていた。

怖い。

そんな考えすら浮かんでくる。

それを知ってか知らずかエルネストは俺を抱えたまま走りだした。

「ジョルジュ王子。私がついていきますから大丈夫です。」

エルネストは『ウィンドブレイク』や『エア・ニードル』で襲撃者を牽制しつつも人の多い場所へと移動していた。

しかし、襲撃者はエルネストの魔法を掻い潜って徐々に距離を詰めてくる。

そしてエルネストに接敵した襲撃者は杖をエルネストへと向ける。杖の先に集まるのは赤の力。
マズイっ！

「伏せて！」

「っ！！！」

オレの声に従ってくれたエルネストは直ぐさま体を倒し間一髪と言う所で杖から放たれた火球を逸らしてそのまま相手の心臓目掛けて『エア・ニードル』を突き刺した。

「ガ……ッ……。」

突き刺されたまま倒れた敵は胸から血を流しそのまま動くことは無かった。

「ああ……。」

この生で初めての死を見た俺は怖くて怖くて一步も動けずその場に座り込んでしまい、エルネストが体を抱えてくれる。

「ジョルジュ王子。大丈夫ですか？」

「あっ……うん……うん……う……う……うわああああああん！！！」

うああああああああああん！！

エルネストの暖かな掌のぬくもりが伝わってくる事に安堵を覚えた

オレはポロポロと涙を流し始めて仕舞には大声で泣き始めてしまった。

自分は大人だからなんて何時もは強がつてはいるけどこう言う時、精神的に子供なのかは解らないけれど。

すごく怖くて、どうしていいかわからなくなって自分の思考が泣いている想いと泣きやみたい思い。いろんな考えがぐるぐるまわってどうにも泣きやむ事が出来ない。

でもエルネストは優しくオレの背中を泣きやむまで抱きしめてくれたのがすごく恥ずかしくて嬉しかった。

同時刻。

数人の屍が豪華な調度品や芸術品が散乱し荒れた部屋の中でその姿を晒していた。

倒れたその軀にはいずれも心臓が貫かれていた。

その部屋には死体を何の感情も抱かず窓の外を見つめ続ける男：ジョゼフと、四肢の腱を切断され舌を噛み切らないように布を加えさせられたジョルジュを襲った男と同じような格好をした者が居るだけであった。

恐怖に震える男は目の前のバケモノが作り上げた惨状を思い返す。

襲撃を仕掛けてすぐに目標である無能王子ジョゼフを殺す。

ただそれだけだった。

それだけのはずだった。

杖を向けて其々が魔法を唱え終えた時あっさりとジョゼフを殺したと思っていた。

だがあのバケモノは自分達が唱え終えた後には仲間の心臓を既に貫

いていたのだ！

その後直ぐに自分に両手両足が折られた青には、仲間達があっけなく心臓を貫かれて倒れていく姿だけだった。

自分は直ぐに布を詰め込まれ逃げ出す事も出来ない。

それらを全て一瞬で行ったバケモノは一体何なんだ！

「怖がらなくてもよい。直ぐに仲間の元に旅立てるだろうからな。」

感情の色さえ感じさせない無機質な声から発せられたその言葉の羅列。

男が理解できるのは終わったという事を理解するだけだった。

「絶望させてやろう……誰を狙ったのかと言う事を……。」

ジョゼフは窓をずっと見続ける。

その視線の先に映るのは泣きじゃくる弟の姿だった。

それを見続けるジョゼフの無機質な表情。

その顔は家族ならば一目見ただけでその感情を理解するだろう。

怒りと。

あの後オレは衛兵達に連れられて部屋に戻ったのだった。

ヴェルサルテイルはオレとジョゼフ兄への襲撃が起こったと言う事で上も下も大きく騒ぐこととなり、

オレは暫く部屋で過ごす事になった。

ただエルネストも護衛としてずっと付いていてくれたのでそれほど寂しくは無かったけどね。

べ、べつに寂しかったんじゃないかな。たんだからね！

……ごめん、自分で言っただけだけどキモかった。速やかに記憶から削除しておくことにする。

4 話（後書き）

修正版です。後の話が少し長引きそうです。

5 話（前書き）

前回のオチと主人公中二になるの二本立てです。
かなり捏造が入っていたりします。

5話

あの事件の後、白昼堂々と王家の人間を襲撃したということでガリア王家の威信にかけて犯人を草の根分けてでも探したらしい。

らしいと言うのはまだ幼い俺に報告するのも野暮だと周りから判断されたのだろう。

詳しいことはジョゼ兄から聞いたけれど、あんまり詳しいことは話してもらえなかった。

ただ、エルネストは知っているらしく詳しく聞き出そうとしたら相当えげつない手を使っただけくらいしか聞き出すことはできなかった。

その時は諦めたのだけれども、数年後に事件を思い出して調べてみたら細かい所は省かれていたけれども幾つか解った事が有った。

捕まった犯人はオルレアン公派に属していた貴族ではあったらしく、ジョゼ兄や俺を殺せばシャル兄が王として指名されると思ったらしい。

どっちかというとシャル兄が王になって発生する利権を狙っていたらしいけども。

どちらにせよ犯人はもう親族諸共物理的に抹消されている上、お家取りつぶしという処分が既に下されている。

領地は王家が没収しており代官が派遣された所、何と言って良いのやら治安最悪、病は流行っている、土地は荒れ果てていたとどうやったら其処まで放置できるのだろうかと頭が痛くなった、

税金も9：1とバカみたいに搾りとっていると本当に絵にかいたような悪徳貴族っぷりの人物のようで、罪悪感はありませんでした。

ただ、件のバカ貴族がシャル兄の為に、なんて言葉も恥も無く吐きだしていたらしく。

その発言に怒りを覚えたジョゼ兄がその馬鹿貴族の目の前で一族を処刑していき、最後に自動投石機なんていうマジックアイテムをど

ここらともなく持つてきて死ぬまで延々と貴族にぶついたらしい。死んだ後は死体を焼き尽くして刑場の墓場に捨てたらしいけど。あまりの悪辣さにオルレアン公派の貴族が次々と抜けだしていく事となった。

最後に残ったのは純粹にシャル兄の事を考えてくれるような人間だったらしく、そういった貴族は能力に合わせてという但し書きは付くが信用できる人間として重用されていた。

それから1年が経ち全て何事も無くとはいかなかったが、降臨祭の後、無事にジョゼ兄が王位を継いだ。

やっぱり周りの貴族。特にシャルル派が騒いでいたけれどシャル兄が宰相位に就くと言う事で段々と収縮していったのだった。

お父さん…父上はそのままヴェルサルテイル内の離宮へと移り悠々自適に過ごすということらしい。

また、その半年前。

父上の最後の仕事としてガリアの悪習。

双子を忌むという事を公式的に撤回し、双子の存在を公式的に認めると言う法が定められ、反応も様々であったが。

王家自身がこの悪習を否定するという発言を出したことで受け入れられていった。

親権を改めて主張という事で、自分が双子の片割れだと騙る者も出たりと混乱もあったが、

ガリアのアカデミーでその者が双子であるか否かというマジックアイテムが作られた事で次第に落ち着いていった。

そして『原作』に出てきたセント・マルガリタ修道院や双子の弟といった人間が集められていた聖堂の存在が暴かれ、そこに居た子供達は希望するならば親元に戻ったり、色んな理由で戻れなくなった者はヴェルサルテイルの城で法衣貴族としての教育を受ける事となった。

この事でロマリアが敬虔な信徒を奪うなどと文句を言ってきたが、ガリア側は、明らかに貴族の娘や息子と知って集めている事は不自然である。と主張。

実際、息子や娘のスペアとして使われていただけではなく。ロマリアの都合によって、片方を暗殺し、すり替えていたと言う事も発覚したために、確信的な営利誘拐という目的もあつたということとで国内での対ロマリアへの感情が悪化してたのだった。

多くの子供達が親元へと戻る事になったけれど、親権を認めない貴族や既に家に取り潰された貴族の子達は親元に戻れないと言う事で悲しそうな顔になっていた。

中には、オレの存在を知って何故かビクリする子もいたけれど、以前のような引っ掛かる者が有つたのでチェック入れておこうと思う。

ジョゼ兄は自身がコモンスペルは使えるようになったということとは隠さなかったが、虚無であると言う事は知らせてはいない。

周りはやつと無能から半人前かと嘲笑していたが、その後、脱税や汚職（実際やってた）で捕まって姿が見えなくなったらしい。

「ジョゼ兄を馬鹿にする者はいつの間にか城から消える」とそんな噂が経つたので次第に静かになっていった。

シャル兄は、あの夜の後直ぐにジヨゼットを取り戻しにいった。そしてその後、双子の悪習が撤回されるまではずっとオルレアン公邸にて家族4人で過ごした。

しかしだ。今までの心の澱みや、ジヨゼットを捨てた苦しみから解放されたという事もあるけれども、これは無い。

オレが教えた精霊への交信を試してみた所、ヘキサゴンメイジになつてしまったと聞いた時は頭を抱えてしまった。

あっさり限界超えやがって。これだからガリアは……。

え、俺も？

ですよー。

ちなみに、オレは今では貴族の子達と遊んだり、勉強したりと一人きりで少し寂しかった頃に比べて騒がしい毎日を送っていた。

最初は王子ということで畏れられたり、敬われたりしたけれど、一緒に遊んだりしたことで大分仲良くなれた気がする。

特に、チェックを入れていた子。

ユーグとラウルの二人とは仲が良い。

この二人はやっぱりと思って探りをいれたら二人も転生者とわかった事もあり、秘密の共有という理由もあって仲良くなっていた。

そして、二人にも精霊の存在を教えたところ、直ぐに魔法を使いこなし始めた。

ユーグが風の系統を。ラウルが土の系統を得意としたメイジとなった。

優秀なメイジの才能があるのかと見られたのか、二人に家名と子爵位のマントが送られ、

ユーグ・ド・ル・ルシエとラウル・ド・ミユールとなり、オレの従

者となった。

まあ、本当の理由の一つとしてジヨゼ兄に二人も転生者だと教えたということもある。（公式的は上の理由となっているが。）

ユーグの名前についてだが、問い詰められた時はオレが決めたんじゃないと主張した。

決して、ピンク色の髪をしているからではないと思う。（ちなみにラウルは穏やかな顔立ちとはちみつ色の髪で、肩まで伸ばしている。ユーグは何となくだけどピンク色の髪のリリカル世界のエリオっぱい気がする。）

また、イザベラもプチ・トロワから出てきて女の子達と遊んでいたりする。

ちよつと勝気な女の子ではあるけれど、原作の様な刺々しさは無い。

少しずつではあるけれど俺の世界は良くなってきた。

先にある不安はあるけれど俺が一番身近だった事柄が終わって何処か気が抜けていたのかもしれない。

そもそも、俺がいる事で有り得ない事象が有り得てしまっていたのかもしれない。

何が言いたいのかというのだ。

現在進行形でピンチです。

攫われました。犯人はエルフです。

オレとセットでユーグとラウルも居ます。

こうなった経緯についてだけど、

ヴェルサルテイルに白昼堂々とエルフが侵入。

エルフが現れて周りが大混乱。

オレが人質で動けない。

そのまま誘拐。

アーハンブラ城に幽閉。 いまここ

ピンポイントで俺が狙われた気がするんだが、何でだ？

眼がバレたのか…それとも違う理由か……。

というか、原作を見て思ったけど子供ですら見下す気満々でイラッと来ます。

アーハンブラ城と知った理由だけれど、何処だと騒いでいたら教えてくれました。（高圧的に。）

逃げ出したくても、杖も取られてどうしようもなく。

大人しく捕まっているしかなかった。

ストレスが溜まる中、檻の中で過ごす俺達だったがエルフの看守役がやってきて俺達をアーハンブラ城の一室へと案内された。

「強欲な蛮人の子よ。お前達には生贄になってもらおう。」

部屋に入っただけで、エルフの一人が言った。

「傲慢なエルフの大人は子供を苛めるなんて、自称・選ばれた民にしては面白いご趣味をお持ちで。」

意趣返しに嫌味を送ったが、良い具合に顔が歪む様が面白い。

「愚かな蛮人が！」

嘲笑を隠そうともしなかったので、怒ったエルフから拳が飛んだ。凄く痛い…口も切ってしまった。

だけど、絶対に泣きたくは無い！

「フン！　すぐにその愚かしい心も無くなるだろう。精々僅かな時間を過ごすがいいさ。」

そう言ってエルフは何かが入った瓶を取り出した。

心…ってマズイ！

あれはエルフの毒じゃないか。

「おい、やめろ！」

俺は叫ぶが、エルフ達はクスクスと嗤うばかりで止めようとはしない。

「全く、穏健派の連中にも困ったものだ。愚かしくも蛮人へと干渉して聖地への信仰を止めようなどとは！

だからこそ、私達は蛮人の長の子を攫い、心を砕き、奴等の愚かな考えを正さないといけないだろう！」

エルフは薬を持って近づいてくる。

「ふざけるな……。」

「心を失うのはお前だけだ。後の二匹は安らかに眠らせてやろう。」

整った顔に張り付く嫌らしい笑みを隠そうともしないエルフはそう言った。

ふざけるな。

「さあ、飲むがいい。」

そう言って薬を口に付けられる。

心を弄られるなんて嫌だ！

嫌だ嫌だ！

お父さんにお母さん。

ジョゼ兄やシャル兄。

イザベラや双子姫。

ユーグとラウル。

沢山の人達との思い出を壊されるなんて嫌だ！

友達を見殺しなんて嫌だ！

いやだよ……いやだよ……。

「ガキが！ 早く飲め！！」

力が欲しい。

状況を切り拓く力が欲しい。

友達を助ける力が欲しい。

何もできない弱い自分に力が欲しい。

二人を守る力が欲しい！

アイツラを焼き尽くす力が欲しい！

アイツラを切り刻む力が欲しい！

力が欲しい。

力が欲しい。

力が欲しい。

力が欲しい。

力が欲しい。

力が欲しい。
力が欲しい。

力が欲しい。
力が欲しい。
力が欲しい。

力が欲しい。
力が欲しい。
力が欲しい。
力が欲しい。

力が欲しい。
力が欲しい。
力が欲しい。
力が欲しい。
力が欲しい。

力が欲しい。
力が欲しい。
力が欲しい。
力が欲しい。
力が欲しい。

力が欲しい。
力が欲しい。
力が欲しい。
力が欲しい。
力が欲しい。

力が欲しい。
力が欲しい。
力が欲しい。
力が欲しい。
力が欲しい。

力が欲しい。
力が欲しい。
力が欲しい。
力が欲しい。
力が欲しい。

力が欲しい。
力が欲しい。
力が欲しい。
力が欲しい。
力が欲しい。

力が欲しい。
力が欲しい。
力が欲しい。
力が欲しい。
力が欲しい。

力が欲しい。

だから、お願いだ。

「悪魔だろうが、神様だろうが誰でも良い。
オレにアイツら全員ブチ殺せる力を寄越しやがれ……!」

そう願った瞬間、世界が輝いた気がした。

「あ、ああ、あああああ、ああああああアアアアアアアア

アアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！」

衝動が、力が溢れんばかりにオレの体を滾らせる。

風が。

火が。

力を貸してくれる。

オレに従ってくれる。

なら…。

ならば…。

宣言しよう。

命令しよう。

断罪しよう。

死を与えよう。

焰よ。風よ。

「邪魔するモノは燃え散らせ。一切合財切り刻め。」

蒼い焰が眼の前の敵を喰らい、焼き尽くす。

悲鳴すら焼き尽くすように燃え上がり、散っていく。

蒼き風が不可視の刃と成って切り刻む。

揺り潰す。押し潰す。砕け散る。後には何も残らない。

エルフどもの姿は消えた様に死んでいく。

骨すら刻んで死んでいく。

魂すら焼き尽くして消えていく。

全部無くなった時、ふと気がついた。

ユーグとラウルは何処だ？

辺りを見渡して二人を見つけた。

どうしたんだろう。

そんなに怯えてどうしたんだろう？

邪魔する奴等は全部居なくなったのに。

エルフは皆死んでいったのに。

コワイやつらはみんなきえていったのに。

ふたりはおれをみている。

ぶるぶる、ぶるぶるふるえている。

おれをみてふるえている。

どうしてだろう。

なんだろう。

ふたりにちかづいてきいてみよう。

「…ひっ！」

……もしかして。

ふたりがおびえているのは

オレ？

オレは目の前が真っ暗になった。

ユーグ視点。

ドサリとジョルジュが倒れた。

ジョルジュが炎と風に包まれ、蒼く染まった炎が全て焼き尽くした。蒼く輝いた風が全て切り裂いた。

ジョルジュもその絶対的な力に全身が飲み込まれていたのに、火傷一つ。傷一つも無い裸身を晒して殺し尽くした。

ジョルジュの蒼穹に煌くその目から離す事が出来ない。

神話に出てくるような絶対者が愚者を叩き潰すかのような光景。

俺とラウルはただ畏れて震えているしかなかった。

そしてジョルジュが俺達の方を向いた時、恥ずかしくも悲鳴をあげた。

それを聞いたジョルジュは糸が切れた様に倒れてしまった。

ジョルジュを見ていると怒りが湧いてくる。

何物でもない、俺自身への怒りが。

ふざけるな。

俺は友達に怯える奴だったのか？

女々しく震えて可愛らしい悲鳴を上げる様な奴だったのか？

「ふざけんな……。」

そんな自分へ嫌悪でいっぱいになり、独り毒づいた。

こんな時自分はどつするんだ？

決まっている。

震えが止まらない足を無理やり立たせ、ジョルジュの元へと向かう。そして、一糸身にまといつていないジョルジュに触れた時、触れた手が熱さに襲われ、風が俺を押しつけた。

収まったと思っていたけど、大間違いだ。

触れた時に理解した。

熱が、風がジョルジュに集束していつている事を嫌でも理解してしまった。

火傷を負った手を復活したラウルが冷やそうとしている間も、この事を苦々しく思った。

際限無く集まった力が暴走していると。理解させられたからだ。

「何をしている、蛮族の子よ。」

どうしようもない現状に押しつぶされそうになった時に、低くも良く通る怜悧な声が響いてきた。

エルフの男視点。

ネフテスの老評議員でもある私が統領テユリユークから使命を受けたのは三日前の事だった。

エルフの過激派が蛮族の長の子を攫い、鬻り者とするという話を聞いた。

誇り高き我らの同胞がそんな事をすると言った時は何かの間違いだと疑った。

しかし、既に事が動いており。私はそれを止める為に呼ばれたと知らされた時に頭痛がしたのは気の所為ではないだろう。

全く愚かなことではあるが、彼らの行ったことは明らかな背信行為を見過ごすわけにはいかないだろう。

面倒ではあるが、彼らを捕縛する為にも私は向かわなければならなかった。

そして彼らが集まっているというアーハンブラ城へと辿り着いた時、精霊が怒り狂うのを感じた。

否、精霊から伝わってくる何者かの怒りが私に触れたのだ。

何事かと思い立った私は急いで中へと入り、城の一室に蛮人の子供が三人だけ居たのだ。

干渉すべきかと悩んだが、恐らく彼らが攫われたと言う者たちだろう。

私は蛮人の子へと語りかけたのだった。

振り向いた二人の蛮人の子は私を見た途端に警戒心を隠そうともしなかった。

そして倒れた子の周りに精霊達が異常なまでに精霊達が集まっているのを感じた。

やはりか。

あたりをつけた私は彼らの警戒心を刺激しないように話しかける。

「私はお前達に危害を加えない事を誓おう。

私は老評議会の要請を受け、背信者であるエルフを抑える為に派遣された老評議員ビダーシャルだ。

その使命を満了させる為、お前達に質問する。

この場で何があったのかを話すがいい。」

子供達は顔を見合わせ、頷きあった後に何があったのかを話してくれた。

エルフ達が倒れた子に薬を飲ませようとした時に、子供から凄まじい火と風が集まり彼等を影一つ残さず狩りつくしたと言う事を。

それを聞いた時、私は耳を疑った。

蛮人の子が我らエルフの同胞達を無傷で殺したのだと易々信じられるわけが無かった。

しかし、倒れた子が。あのとき感じた怒りの根源がこの子供ならばあり得ぬことではないだろうと頭の何処かで、普段の私からは考えがつかない考えが浮かんだのだ。

私は見たままを報告する為、直ぐにでも立ち去りたかったのだがそうにもいかないだろう。

倒れた子に集う精霊たちの力が尋常ではない程に集まってきている事をただ居るだけで感じるのだ。

もしこのまま集め続けた末に解放されたらどうなるのか、危機感を覚えた私は取引を持ちかけた。

彼等は渋々ながらも了承し、
無駄な争いを避ける為に過激派達がエルフではないと言う事とする
事。

その対価として子供の治療を行うと言う事となった。

私だけだったのなら直ぐさま逃げようとしただろうが、この二人
は蛮人の魔法を扱う者なのか風の精霊と土の精霊の強い力をそれぞれ
感じた。

彼らの力を利用するため、私は二人の手を取り、精霊へ呼びかけた
のだった。

土、水、火、風。

4つの精霊たちの力が私たちを巡り、ゆっくりと世界へと解放され
ていく。

想像以上に力を溜めこんでいたようで想像以上に疲労してしまった
が、処置が終わった後私はこの場を後にした。

早く伝えねば。

疲れた頭ではそれだけしか考えに無かった。

…。

……。

………んあ？

あ……さ……？

鉛の様に重たい体と頭に映る世界からは柔らかな陽の光が見覚えのある光景で映っていた。

ここってグラン・トロワのオレの部屋だよね…？

確か、オレ達攫われて、エルフに毒薬を飲まされかけて……。

そして、オレが…、そうオレがエルフを殺したんだ。

あの時世界が広がった気がした。力が漲った気がした。

あの時は本当に現実だったのだろうか？

……火よ出る！

なんて出るわけな…

ボオ。

「ちよっ、まじで？」

やはりあの時と同じく蒼い火が、あの時よりは遙かに小さいけれど、確かに火が俺の手の上に灯っていた。

……ということは。

火と同じように風を吹かせてみると、あの時の様な蒼い風では無かったが確かに風が部屋を巡っているのを感じた。

これなんて精霊術。

そういうメタな思考が頭によぎるが、確かに火や風から精霊達が俺に従ってくれていると感じた。

火も布団に触れているが、俺が燃やそうとは思っていないので全く燃えない。

……いや、蒼いからって常時神炎？

火を消して頭を抱えるが。

オレって何時神風殿馬になったんだと内心ツツコミを入れた。

いや、ちゃんとオレはジョルジュだけどさ。

……あー、もうじつとしていても答えは出ない！

オレはベットから飛び起き、ドアを開けようとドアノブに触れようとした瞬間顔を強打した。

ばなちでだ。

顔の治癒と、鼻血を止めた後、部屋に入ろうとしたイザベラが皆を連れてきた。

ジョゼ兄は政務が終わっていないので来れなかったけれど、シャル兄があの後何があったのか説明してくれた。

オレがあその後倒れ、危険な状態だったらしいとのこと。

エルフ達は後からやってきたビダーシャルというエルフとの取引でエルフが誘拐したということではなく、

俺達をさらったのはエルフではなく。エルフの名を騙った亜人で、その事に怒り狂ったエルフが一人で亜人を滅ぼして、そのまま去って行ったと言う事を公式的に発表した事。

その後、王軍が倒れた俺とユーグ達を保護した事。

ヴェルサルテイルで俺が眠ったままもう半月が経ったと言う事を教えて貰った。

今は関係者しかいないので、杖も無しに火と風を操れるようになったと言うと。

シャル兄が「ジョルジュだしね」と軽く流された。

むしろ、精霊が見えるなんていう事ができるのでそう言う事が出来ても別に不思議では無いんじゃない？

って、言われて納得してしまったオレがいた。

また、あその後からユーグとラウルも風と土をそれぞれ操れるようになったらしく。

そっちの方が驚きだよなって言われてちょっと泣いたのはひみつ。

一応、この力は普段は杖を使っているという形にしておきなさいと言われたのでちゃんと了承しておきました。

最後に、あんなことがあったから暫く大人しくしておきなさいという言葉も貰い、

大人しく従ってのんびりと本を読んだり、イザベラやユーグ達と話したり。

たまにシャルロットとジョゼットがお見舞いに来て、可愛らしい二人を愛でたりしたり、撫でたりしたり。

一応力モフラージュ様に杖として使える腕輪が欲しいとジョゼ兄と相談して過ごして言ったのだった。

対価に『場違い』な本の翻訳をする事になったけど良い暇潰しだった。

本ていうかマンガだけどさ、

ジョジョ1部から6部まで完全セットとかピンポイントすぎね？

とりあえず、『世界』のナイフ投げとかを教えてみて早速使っているジヨゼ兄だったけど、ちよつと押してはいけないスイッチを押した気がしたのは気のせいだろう。

WRYYYYYYYYってやってるのもオレは見えていない。

数年後、偏在するナイフなんてマジックアイテムを入手したジョゼ兄が某弾幕の影響を受けて、

『エターナルミーク』とか『ジヨゼフの世界』とか言うのもオレの所為では断じてない。

5 話（後書き）

エルフのモブには大体こんな印象を持っています。

6話（4月8日改稿）（前書き）

やっと改稿です。

作品自体を忘れていたわけではありませんが、筆が進まない。

他の方の作品を見て回るだけで時間が進む進む。

言い訳にすぎません。

最近は最近でPSP2とかもうすぐスパロボ二次とか誘惑が
沢山です。

頑張って投稿していきたいです。

改めてよろしくおねがいします。

6話（4月8日改稿）

誘拐事件から早くも1年が経ち、城の警備の問題点も見直された。王族が誘拐されたということで近衛騎士団はその責任を問われてそれぞれ騎士団の団長は職を辞し。

精鋭とはいえ騎士団の中には家柄だけで入った奴も居る訳で、そう言った人間も騎士団から出ていくことになった。

新たに団長に選ばれるにあたって、以前は家柄も重視されていたのではあるが、今回は王の意向もあつてか完全に実力と人望を考えて選ばれる事になった。

現在ではオレが翻訳した日本語の本をジョゼ兄が読んで、統治へのヒントにしてそれを発案したり。

そのぶつ飛んだ案をシャル兄が抑えたり、受けいられる様に修正したりと慌ただしい日々を送っている。

今の大臣や官僚は優秀な人間から選ばれてはいるのだが、流石にジョゼ兄の鬼才にはついていくのが大変なようで連日彼等の部屋の床や部屋の前には誰かが倒れているらしい。

あまりのブラックさに引いていたオレだったが、どうにもこうにも以前までの官僚や大臣がどこの部署にも賄賂やら横領といった行為が延々と積み重なっていたようで。

良くもまあ国が終わらなかつたと言えるほどであった。

そんな彼等の努力に涙したオレは彼らに感謝を述べる事しか出来なかつた。

言うまでも無いがそんな汚職貴族共は程度にもよるが、財産をいくらか没収したり。

酷い場合には貴族位没収の上、領地没収等も行われている。

ジョゼ兄は呆れた様にこれで中央の強化が大分進んだと言っていたけどね。

官僚及び大臣、彼等の休暇はまだこない。
そして彼等が倒れるまで後少し。

「ハア……？」

お披露目？

オレの？

なんで今更……確か生まれた年と2年前にやったはずだよね」

そんな慌ただしいグラン・トロワにある王室用の食堂。

王家の人間だけ卓に着く事を許されたその一室。

ジョゼ兄と二人きりで朝食を摂っていたオレはテーブルの反対側に居るジョゼ兄にそう言った後、スープを掬って飲む。

申し訳程度に香草を浮かべているだけで具も何も無いように見えるけれど、澄み切った黄金のスープから伝わってくる味はしっかりと食材の凝縮されてある様に舌の上で躍る。

ほっこりとスープを全て食べ終えた俺は余韻に浸り溜息を漏らす。
イカンイカン。トリップしてしまつて恥ずかしいなもう。

ちなみに、今食卓に就いているのはオレとジョゼ兄の二人だけ。

シャル兄はオルレアン公領に帰省しているし、イザベラもそれに着いていつてしまったので食堂で他に居るのは給仕くらいなもので外の時間から切り離されたような感覚を覚える。

そうそう、二年前というのはオレの社交界への初お披露目の場。

あの時は非常に緊張してカミカミだった。

ごめん思ひだしたら頭を打ちつけたくなった。

「ジョルジュ、頭を突然打ちつけ始めるのはやめろ」

「今日も最高の味をありがとって後で料理長に伝えておいて」

「かしこまりましたジヨルジュ殿下」

「そして何事も無かったように振る舞うな」

うつせえ。

黙ってる。物凄く恥ずかしいんだ。

給仕長へにつこりと笑って感謝を伝えると、給仕長は頭を下げる。最初は少し戸惑ってはいたようだけど今では慣れたものだ。

ちなみに今日の献立はスープとパンとサラダ。それに焼いた魚が出てくるだけのシンプルな朝食。

本来ならば朝にゴテッと料理が出てくるのがハルケギニアの王侯貴族の常識……というか贅沢だったのが、

ジョゼ兄も残す量が多い事を嫌っていたのか、朝昼晩とバランスの良い量に調整した料理を作れと命令したのであった。

このことで普段からもつたいたいと思っていたオレもこれに賛成したが、周りの者や更には料理人達が反対の声をあげた。

だがしかし。負けたくない俺達兄弟は確実に勝利を得る為にシャル兄に協力（脅して）を要請（巻き込み）したのだった。

四面楚歌。始まる大舌戦。

シロカクロが決着付ける為のダンガンロンパ……とはならなかったが、彼等を論破するのはなかなか骨が折れたものだった。ジョゼ兄が何故かオレに振るものだからかなり大変だった。

最終的には量が減る分は質を上げる。

量が少なくてみずばらしいのなら優雅な盛り付けをすればいいじゃないという意見を挙げ、賛成を取り付けたのだ。

おかげで最近の食卓事情は質が大幅に上がった食事で正直幸せなの

である。

それに料理長達はオレ達の健康にも気を使ってくれるので万々歳だ。その時の事を思い出していたオレはグラスに注がれた冷たい水を飲み干す。

丁度いい冷たさで喉が潤う。

「聞け」

ごめんなさい。

「で、何なのさ一体」

「簡単に言うとお前の魔法の披露会といったものか。

お前が魔法を3歳のころから使えるのは今更な話ではあるが、実質お前を出汁にした社交会だな。

オレもシャルルも似た様な事を行ったものだからお前もと言う訳だ」
「大体は解ったけどさー…ぶっちゃけ最近のガリア王家は色々とき抜けちゃって加減が出来るのか解らないんだけど」

お披露目と言う事は、広く貴族達にオレの実力と言うか才能が知られると言う事だ。

それは別にいいんだが、最近の王家とその周りの人間の実力の向上がおかしいのでどのあたりが適正なのか具体的に良く分からない。ジヨゼ兄は『加速』を基本にした超高速戦闘術があるし、

シャルル兄はソロでセプタゴン（七角形）・スペルを使えるようになった。

オレは火と風でそれぞれオクタゴンまで行ける。そもそも精霊術でそれ以上で更に細かい制御が出来るんだけどね。

パシリのエルネストも精霊との交信法を教えた結果ペンタゴンクラ

スだし。

ユーグとラウルに至っては精霊術を習得したおかげで、単独系統で6つを普通に足せるようになってる。(その上更に別属性を足せる)

まあ、あまりに異常というかこれらが広まると厄介事しか呼び寄せないだろうと言う理由から、

この事を知っているのは本当に信用できる人間にしか知らされていない。

でもシャルル兄が

「これでも烈風に勝てるなんて難しいだろうね」

そう言っていたのが耳に残った。

どんだけ烈風ってチートなん？

「……まったく。バグめ。とりあえず、トライアングルとでも名のつておけ。シャルルが教えたとしても言えば周りは納得するだろうか
らな」

「そっくりそのままお返しします！ あとシャル兄の名前使えば大丈夫だろうね」

具体的な話題には出さないけれど、オレはいつもの様に切り返したのだった。

ちなみにバグとか言う言葉づかいが最近ジョルジュ語と呼ばれ始めたのは何故なんだろうか。

オレは恋愛原子核は持っていないはずだけど。

「まあ、最近天才児が多いという噂ではあるが、これからお前は色んな意味で前代未聞のメイジとして話題に登るだろうから覚悟だけはしておけよ」

最近天才児が多いということはオレと同じ転生者の存在が関わっているのではないかという可能性があるが、詳しいことは解っていない。

ジョゼ兄の方針で今は転生者達を積極的に取り込む必要が無いということ、オレ自身も特に異論は無いので、その方針に従っている。まあ、どの家も魔法のお披露目をしているということではないが、やはり噂は流れるものでどこぞの家の御子息やご令嬢が10歳云々でトライアングルやらスクウェアだという話が流れてくるのである。だからというわけではないが、

「面倒」

「決定事項だ。精々貴族共を楽しませるような余興を考えておくことだな。そうすれば俺が面白い」

「悪魔め……」

「何なら悪魔らしい方法で楽しむまでだ」

「ド畜生！」

こうして二人きりの朝食は終わった。

朝食の後、自室に戻ったオレは椅子に座ってジョゼ兄から言われた事について考えていた。

余興……ねえ。

ジョゼ兄は

『オレはトライアングルクラスでーっす』

なんてただトライアングル・スペルを使って見せろと言っ訳である事を言ったのではないだろう。

一応会場の書類や招待客の名簿やらを注約付きで見せて貰ったけど、出るわ出るわ大量の大物貴族の名前。

普通にやるなって言われていたのが良〜くわかった。

もう、深く考えるのは止めよう。

とりあえず、手持ちの能力で何処までできるかだけど……。

なーんにも思い浮かばない。

溜息をついてベットにころんと横になって、ぼーっと披露会の事を考えていた。

そっぴや披露には夏季休校に入った貴族の子息達も幾つか来る予定があるっていつてたな……。……。

そっぴや夏っつていえばガリアの夏は結構爽やかだよねえ……。……暑いのはどこも同じだけど。

昔は一度ビアガーデンでキンキンに冷えた酒を飲んだり焼肉を食ったりしながら花火をみたっけな……。……あ、花火？

これだ！

季節の新緑に包まれたヴェルサルテイルの庭園。

そこに開かれたジョルジュ殿下の魔法の腕を披露する夜会に参加したのだが、ジョルジュ殿下も最近流行りの「天才」メイジだという。招待状を見た私は苦笑して、自身の子の優秀さを自慢する貴族から、良く招待状が送られたなと、思ったものだ。

確かに、5歳かそこらでラインクラスになる者は天才と言っても良いだろう。

だが、その流れにもいささか飽きというものが訪れており、王族とはいえその程度では満足されぬだろうと内心同情したものだ。

やがて夜会は始まり、国王陛下からジョルジュ殿下を紹介された。

成程。

確かにその歳にしては聡明であると言える。

しかし、魔法はどうなのかと冷ややかに眺めていたものだった。

ジョルジュ殿下が杖を取り出し、スペルを唱えて杖を振ると風が会場を包み込む。

その風に巻き上げられた花の花弁がジョルジュ殿下の傍で舞い踊っていた。

風のメイジなのだろうと思わしき貴族達はトライアングルクラスかとひそひそと話している。

トライアングルとはいえ、これでは地味過ぎて他の系統に伝わらないだろうに。

そう思っていると、殿下が更にスペルを唱えている様子が見えた。

更に杖を振ると、花弁が燃え上がり、紅、蒼、黄金と艶やかな炎が生まれた。

それを見て私は成程と感心したが、それはただの前座にしか過ぎなかったのだ。

炎が収縮して火球となり、強い火の力を感じた瞬間。色とりどりの火の球が高く空へと飛び上がった。

何をしたのかと呆けていると轟音が響く。

この場所で大砲！？

急いで周囲を見てみれば空に花が咲いていた。

暗闇を照らすその花は一瞬で散ってもっと見たかったという哀愁を思わせたが、更に音と共に花が咲き乱れる。

なんという…なんという…美しさだろう。

華やかさだろう。

そして、儚さだろうか……。

周りの貴族達も、演奏していた音楽隊も空に咲く火の花に魅入っているのか恐ろしく静かな空間。

「皆様。楽しめたでしょうか？」

ジョルジュ殿下の声で凍った時間は直ぐに解け、全ての話題が殿下の事へ移り変わって行った。

その後しめやかに夜会は終わったのだが、

後日。あの魔法がリユティス全域で目撃されたと言う噂が流れ、社交界は暫くジョルジュ殿下の火の花が話題を攫って行った。

中には火と風のメイジで再現できないかと言う話まで出てきており、新しい楽しみが生まれそうである。

オレが行ったことは魔法で花火を再現する事だった。

ハルケギニアにも花火はあるが、日本の様な形の花火は存在していないのだ。

しかも精々が打ち上げ花火ではなく、仕掛け花火のようなパーティーの演出や余興ぐらいなどでしか使えそうにないものばかりだし。そんな訳でオレは火の色と風向き等を調整して花火を打ち上げたのだった。

でも打ち上げるだけじゃつまらないかなーと思ったので、会場に飾られている花の花弁を風で巻き上げてから火を付け、それらを種火のように使って打ち上げ花火をあげたのだった。

結果は大成功。

呆けた様に空を眺める招待客が面白かった事は心にしまっておこうと思う。

披露会が終わった後、ジョゼ兄からよくやったと褒められたのだった。

貴族達が呆けているのが非常に面白かったらしく。

何か好きな褒美でもやろうと言われたので、せっかくだからと力のある程度解放できる場所が欲しいと伝えた。

ジョゼ兄は暫く時間がかかるがそれで良いなら待っておけと言っていたが、

それがあんな事になるとはなー…。

ネタアフターIF編 ジョルジュがBETA世界に來ちやいました。(前書き)

続きが書けないけど関係ないネタは浮かぶ。

どうしようもないので思い浮かんだネタを投下してみた。

ネタアフターIF編 ジョルジュがBETA世界に來ちゃいました。

色々あったけど、最終的にガリア大勝利で終わった大隆起を端に発するロマリアの陰謀事件。

これで枕高くして眠れるぞ　　と寝ていたら、朝起きた時に何故か見覚えの無い部屋に居た。

どーみても知らない天井。

なんでかなーと眠っているとか何かに抱きつかれている感覚。首を動かして横を見ると全く知らない男と目が会った。

「へ、へろー」

「みーとう？　……じゃ、ねえええええー!!」

ゴメン誰か説明して。

それは、語られる事は無い結末。

「オ、オマエは一体誰なんだよ!？」

「ジョルジュ・ド・ガリア今年で18かな。で、君は？」

「オレは白銀武。俺も18だな……って違う!」

「おお、見事なノリツツコミ」

「何か疲れてきた……」

「元氣出せよ!」

「お前の所為だろ!!」

「そんなに怒るなよほっしー」

「ほっしーって誰!？」

「えっ、タケルの中の人？」

「中の人なんて無い!」

とてもちいさな、

「またこの世界か……もう一度戦えつて言っのか純夏？」

「マジでロボットだーカッコいいなあ」

「オマエはもっと真面目にしろ！」

「アイタツ！ なにすんだテメー！」

「なんだろう？ この懐かしくも逃げられない雰囲気」

「エーテルフィスト！」

「あがー！？」

とてもおおきな、

「また来たの？ ガキ臭い英雄さん」

「夕呼先生……まさか！？」

「思っての通りよ。最もアンタには余計なモノもついているようだ
けど」

「オレの事ですわかります」

「で、アンタ何なの？」

「異世界の転生した魔法使いです」

「……（可哀想なモノを見る目）」

とてもたいせつな、

「……魔法使いなのは信用するわ。実演してもらったしね。で、転生って何よ。私たちの事を知って居るみたいけど？」

「死んで生まれ変わって、今の自分になる前にマブラブオルタネイティヴっていう白銀武が鑑純夏を救うノベルゲームがあっただんだよ」

「それはオレ達の世界が創られたって事なのか!？」

「落ちつきなさい白銀。創られて居ようが居まいがこの世界が今在る事には変わらないわ。そんな些細な事はどうでもいいの。私が知りたいのは、アンタが知っている事全てよ」

「大したことじゃないですよ。オレが知っているのは白銀という視点から得たモノくらいですし、オレ一人居ようが居まいが大局的にはそう変わりはないと思います」

「……使えないわねえ」

「幼馴染に気がつかなくて他の女の子とちち繰りあっていた白銀よりはマシだと思いますよ？」

「それもそうね」

「なんか矛先が俺に!？」

「気のせい気のせい」

「そうよ白銀」

「仲良いですねアンタたちは!」

とてもふしぎな、

「今日から訓練兵になりましたジョルジュ・ガリアです。よろしくお願ひします!」

「同じく訓練兵になった白銀武です。よろしくお願ひします!」

「二人は香月博士の元で働いていたが、元々正式な階級を持つては居なかった。特に白銀は現役の戦術機乗りだ。得る部分は大きい。」

共に訓練が出来る事を幸運に思え！」

「……で、白銀は良いとして、ガリアは何が出来るの？」

「ジョルジュでいいよ。えっとね、こう指先から……火炎放射が！」

「な、なにやってんだジョルジュウウウ！！？」

「更には空を飛べます！」

「……わぁお空をとんでますー」

「ジョルジュ浮いてる」

「なんとも不思議な光景だ」

「……って、何やってるのアンタは！ 貴方達も現実逃避しないっ！」

「やろうと思えば、このように金を作る事も」

「すごいピカピカだねー」

「（タ呼何でこんなトンデモ無い子連れてくるの……！！？）」

あいとゆうきとまほうのおとぎばなし

「行くぜタケル！」

「おう！」

『人類を、人間を、俺達を、無礼なBETA！！』

ネタアフターIF編 ジョルジュがBETA世界に来ちゃいました。(後書き)

この話を書く予定は未定です。

思いつきりジャンルが違いすぎてジョルジュの存在がギャグにしかならない。

7話

やあやあ。

プロデュース・オレの花火大会から一年程が経ったんだけど、オレの生活は変わらず城の中で完結しています。

一応は誘拐された王子様なんで、再犯防止の為にもしつとさせておきたい所なんだろう。

幸いにして、ジョゼ兄のやることなす事が娯楽になっているし。

オレ自身も翻訳の作業や魔法の訓練、礼儀作法や歴史文学教養といった勉強で退屈というのは無縁だったけどね。

前二つはともかく、残りは非常に面倒なんだけど本当に最低限の教養が身について居ないとオレ自身がバカにされるどころか。

ガリアという看板にも傷が付いてしまうので必死に覚えている所。

正直一人だけだと嫌になってサボる事は確定だったけど、エルネストのマネージメントとサポートでなんとか最低限の教養が身に着いたと言えるだろうという所までこぎつける事が出来た。

本当にエルネストの存在は有り難かった。

今度お礼にプレゼントを渡したいと思うんだけど何が良いんだろうか？

良く考える必要がありそうだ。

個人的なお礼だから、あまりに高価なモノはまず除外されるし。

王族という観点からアットホーム過ぎてもまた困る。

うーむ……難しい。

とりあえずこの件はゆっくり考える事にしよう。

「ジョルジュ様そろそろ訓練の時間になりますか……」

「そうだったね。直ぐに行くから待っていて」

「かしこまりました」

とりあえず、さっさと着替えて訓練場へ行こうと。

……
……

振り抜かれる棍を受け流す様に自分が持っている棍で防ぐ。

相手も隙を与えないように打撃を与え続けるが、無論そのまま受け続けるだけではなく。

タイミングを合わせて、相手の棍を弾き飛ばした。

その隙を狙ってすかさず棍を相手へ打ちつけるも、するりと抜けられ頭部へ衝撃が走った。

「いつてー……」

「中々上手くなりましたね」

相手だったエルネストは爽やかにそう言うが息を殆ど乱して無いので非常にむかつくのである。

くそう、また負けた。

オレを痛む頭に簡単なヒーリングをかけて髪をわしゃわしゃと搔く。

今やって居る事は棍を使った近接格闘術で、エルネストがその道の達人だということと稽古を半年前からつけて貰っているのだけど。

実の所、最初はエルネストがその道の達人だとは知らなかった。（

正直に伝えたら何故かがつくりと地に手をつけていた。）

エルネストの家はどうやらロバ・アル・カリイエから伝わったとされる武術（本人曰く由来が不明。一応ハルケギニアでは無いから東方（ここでは無い所）の名を冠している）を継承しそれをメイジの戦法に組み込んだ功績から興された家である。

しかし数百年前から、ここ十数年年の長きにわたって「貴族とは優

雅たれ」という考えが流行し戦闘メイジですら精々杖剣……あるいはレイピアを振るくらいでメイジ、ひいては貴族が近接戦闘を行う事が泥くさくて優雅じゃないと言う事で実戦を見据えた戦いをする戦闘メイジがマイナーになりつつあった。

今でこそ知る人ぞ知るものではあるが、その間も磨き続けられた業は確かに今でも伝えられている。

というか、実体験で味わっている。

ちなみに、いつもの二人も訓練に参加しておりユーグは槍を。ラウルは三節棍（ハルケギニア種別的にはフレイル）を使った戦闘術を教わっている。

多様な武器を扱えているエルエストに改めて感心したのはココだけの話である。

この話を聞いたエルネストが元々私は騎士だったのですが……とガツクリと頭垂れていた。

「三人とも本当に筋が良く、たった半年でここまで強くなっているようですので、そろそろ戦闘を意識した武器を作っても良いかもしれませんね。陛下からお許しが出ているようですし」

「え、本当？」

「本当ですよ。ただ、陛下から王族とのお供なのだからそれなりに高級なものでないといけませんので職人と打ち合わせしなければいけませんかね」

「オーダーメイドということですよね？」

「そうですね武器であると同時に、「杖」でもあるのでオーダーメイドのほうが良いと。シャルル宰相閣下の判断もありましたので、予算もかなり組んで戴いています」

「シャルル兄も関わってるの？」

「ええ。ですから三人にはもっと力をつけて欲しいのだそうです」

シャル兄も関わっていると聞いて何だが少し嬉しくなってきた！

よし、頑張るぞ！

「エルネスト。早く訓練の続きをやるう！」

「かしこまりました」

結果は惨敗。

ちくせう。次は負けん！

……

……

訓練も終わり、その後は特にやる事も無かったのでオレは翻訳済みの書類を持ってジョゼ兄の執務室へ向かう事にした。

向かう途中、文官が倒れていたが何時もの事なので女中のメイドに仮眠室へ連れていくように頼んでおいた。

そんなこんなでジョゼ兄の部屋へ就いたが、ドアをノックしても反応が無い。

むしろ、ドタバタと部屋の中から音がしている事が非常に気になった。

どうしたものかと一瞬迷ったが、何かあってからでは遅いだろうと思ひオレはドアを開けた。

「ジョゼ兄、入るよ？」

扉を開けると其処には黒髪のおレと同じくらいだろう少年と、少年を押し倒すジョゼ兄が居た。

オレは紳士なので何も見なかった事にしようとドアを閉めようと「

待て、ジヨルジユー!!」：ちっ！

「何やってるのジョゼ兄？ 少年愛に目覚めたの？ 正直オレも射程範囲内に入りそうだからこのまま何処かへ行きたいんだけど。具体的にはシャル兄の所に」

「待て！ 話を聞け！」

「離せ！ 何すんだオッサン！」

「……ジョゼフ陛下？」

「友好レベルを下げるな！ ただサモンサーバントして出てきたのがこいつなんだ！」

「……少年逃げる。そのオッサンはお前にキスしようとしているぞ！」

「離せええええええ!! オッサンとキスなんて嫌だあああああ
あ!!!!」

「ジヨルジユウウウ!!!!」

「兄……上……？」

シャル兄登場。

さあ、盛り上がってまいりました。

「シャ、シャルル!? その、だな。これはサモンサーバントで兄上？」ヒイツ！」

なんかシャル兄から物凄い黒オーラが漂って来た……。

よし、逃げよう……あれ？

足が動かない…?

足元を見るとアースハンドらしき物体がオレの足を掴まえている。というかシャル兄、土魔法使えたんだね。

「ジヨルジユもだよ？」

オレオワタ

というかシャル兄……最近パラメーター上がり過ぎだよ……。

「うう……頭が痛い」

「自業自得だろう」

「オッサンコワイオッサンコワイオッサンコワイ……」

思いっきり頭を殴られたから痛いよ。

ジンジンする頭を撫でつつ、隣でブツブツ呟いている少年に顔を向ける。

一人凄いトラウマ入ってるなあ。

というかこの少年明らかに東洋人……つか日系人に見えるんだけど。もしかして、もしかする？

ちよっと話しかけてみよう。

「なあなあ、少年」

「な、なんだよ!？」

ちよっとビビっっていて面白い。

これが「さでずむ」って奴なのか。

「お名前はなんだい？」

「……ひらがさいと」

「Oh……」

やっぱりか。

こう言う時になんで嫌な予感だけは良く当たるのかと思考逃避したいが、ちよつと現実を見ないとだめだよな。

何故呼べたなんて答えは出ないし、精々バタフライエフェクトしか現時点では言えないだろう。

オレがこの件で関われるのは一言だけだ。

「で、話を戻すけど。コイツ、ヒラガサイトを使い魔にするの?」

無論、聞くのはジョゼフ兄だ。

「……正直な所悩んだが、この先何かあった時の保険としては必要だろう?」

「まあ、否定はしないけどさ……」

「お前の情報からではあるが、虚無魔法には地球へ通じる魔法もあるのだろう? 上手く使えば、面白い事になるとは思わんか?」

「それ聞いただけだと、子供を利用する最低野郎にしか聞こえないんだけど」

「解つてて言っているだろう?」

「一応はね」

「なら問題ない」

左様ですか。

その後の事は言うまでも無いだろう。

契約のキスにまた一悶着があり。

今度はイザベラに白い眼で見られて関係回復に尽力する哀れな父親の姿が在ったとだけ伝えておこう。

序に言えば風のうわさにジョゼフ陛下は少年愛に目覚めたとか、ジ

ヨゼフ陛下×サイトきゅんとか聞こえたが聞かなかった事にしたい。
ジオルジュ殿下×サイトきゅんなんてものも聞かなかった事にしよう。
うん。

そしてサイトが得たルーンはミヨズトニルンで、ガンダールヴでは無かった。

そこは良いとして、当初ショックで寝込んでいたサイトだが。

ジヨゼ兄が家には責任もって返すから暫く居ると良いと言って客人待遇として迎えられた。

立場としては、オレの友人としての東方出身の貴族の血を引く子供というものだったが、ある種似た様な立場のユーグ達が居たので特に気にされた風もなかった。

ジヨゼ兄が政務の傍らで虚無魔法を得る為に部屋にこもる時間が多くなったが、それ以外はサイトと言う友人を加えた生活は今まで通りの時間が流れていった。

………

それから三ヶ月後、『ワールド・ドア世界扉』の魔法を修得したジヨゼ兄はサイトとシャル兄、オレとユーグ達を連れて地球へ転移した。

ジヨゼ兄自身は既に世界扉試しており、向こう側でも問題無く使える事を確認していたため問題無く王族男子三人揃って地球要りを果たしたのである。

問題となつたのは地球へのイメージではあったが、リコード（記録）の魔法を使ってサイトの衣服や持ち物から地球のイメージを得る事が出来、確りとしたイメージで地球へ行く事が出来た。

ちなみに、イメージがしっかりしていないと変な所に出たり、空中

だったりするらしく。下手に使うと最悪地中に出る可能性があるらしい。

それを聞いてオレの顔が少し引き攣ったのは仕方がないだろう。一応服装はパンツ（ズボン）にシャツとシンプルかつ現代でも通用しそうなデザインをしそうな服を着ている。解りやすく言うとな無難な服装だ。

そして眼の前には漢字で『平賀』と書かれた標識があり。オレはピンポンと呼び出し鈴を押した。

「はい、どなたでしょう……か」

玄関から出てきた女性。恐らくはサイトの母親だと思われる人物がサイトの姿を見て眼を瞬かせている。

サイトも久々に会えた母親を見ていても経っても居られず抱きついた。

サイトの母親も直ぐに動きを取り戻してサイトに抱きついて涙を零す。

「才人…才人……」

「かーさん…かーさん……」

抱き合う親子を見て、最近父上と母上に会って無いなと思い自分ももらい泣きしそうになる。

「母さんどうし……才人!？」

表が騒がしい事に気が付いた才人の父が玄関でサイトを抱きかかえた妻を見て驚いた。

「お前、今まで一体何処に！ そのアンタ達は？」

「申し訳ありません。私はジョゼフと言うものでして、予期しない事によってサイト君を連れだしてしまいました。詳しい事を話したいのですが、少々込み入った事情になりますので中へ入れて貰ってもよろしいでしょうか？」

「……解った。母さんも中へ行こう」

サイトの父はそう言ってオレ達を家の中へ案内してくれた。

「……と、言う訳なのです。三か月の間サイト君を連れだしてしまい真に申し訳ありませんでした。」

家の中へ入った後、オレ達の出自とサイトがハルケギニアに来てしまった事を、魔法の実演を混せて説明した。

最初は懐疑的だったが、魔法の実演をして納得してもらった。しかし、ジョゼ兄が偉そうな態度をとらない事に最初違和感を持つたけど。それくらい本心から謝罪をしたかったのだろう。

「いや……ジョゼフさんとジョルジュ君から確かに魔法というものの実演をして貰ったので信じる事にしますが。一つだけお願いがあります」

「はい」

「フツ！」

そのままサイトのお父さんの彩人あやひとさんはジョゼ兄を殴り飛ばした。

「これで、サイトを連れだした事についてはチャラにしましょう」

「……ええ。ありがとうございます」

お互いにケジメをつけたかったのだろう。

その後二人は席に戻り、居直し雑談しながらお互いの話をし合う事になった。

その日は、平賀の家に止まることとなり。

子ども組はさつさと布団にもぐったのに対して、大人組は夜遅くまで宴会をしていた。

兄二人は王族の責務から一時的にでも解放されたのか、羽目を外すのもわからなくも無いけど、やり過ぎじゃないのだろうか。

まあ、その次の日に二日酔いになったのは自業自得である。

その後、度々平賀家と交流した我がガリア家ではあるが。

交流を続けるうちに、彩人さんが会社を退職し信用の置ける人達に声をかけて貿易会社を興し商売を始めた事を知った時はサイト共々緑茶を吹いた。

更に、ジョゼ兄と結託した彩人さんが東方との交易を行う商人（という設定）として王家御用達のブランドと、その文化活性から付随した市場活性の利益等からの功績により、

領地こそは無いけれど子爵の爵位を貰ったと知った時はサイト共々シャルロットが作ったリンデー茶で吹いた。

オレとサイトとは大隆起問題を解決すべく、その方法を模索していた。

そんなこんなで騒がしい日々を送りつつ。

オレは15の年となった。

7 話（後書き）

次から学園編に入っていきますが。

正直飛ばし過ぎたと言つ自覚があります。

また改稿するかも…モウシワケナイデスorz

サイドストーリー ショート&ショート(前書き)

短編2つお送りします。

力を抜いてお楽しみください。

寿司食べたい。

サイドストーリー ショート&ショート

ガリアの薔薇

ハルケギニア屈指の国力を持つ国「ガリア王国」。

その首都リュティス近郊に存在する壮麗にして荘厳。

豪華絢爛の粹たる城、ヴェルサルティル宮殿の一室で二輪の薔薇が咲き誇っていた。

ガリアの誇る青薔薇ジョールと、その親友黒薔薇サイトーン。
ふた

「おい、エルネスト。これ書いた馬鹿は誰だ？」

あまりの事に本を灰にしまつて作者が解らなくなつてしまつた。
この燃えた本を持つてきたのはエルネストだったから、オレは彼に聞いた。

「その……」

「うん。手打ちとかじゃないから安心してくれ」

「……プチトロワ宮の侍女長です」

「ああ、彼女か。1年給料ナシで」

「かしこまりまし「殿下ああああ……!!」」

扉を突き破るように出てきたのは件の侍女長エリザさん（28歳・未婚）だった。

彼女は魂の奥底から震えるような迫力でオレと向かい合う。

「殿下、何故。何故私が給料を1年も貰えないのだと言つのですか！ 私のこれからの生活費はどうすればいいのです！」

「いや、別に。基本的に食事は国から三食でてるし問題ないじゃん」
「問題大ありです殿下！ 私のお給料が無いとなると私の待つ人が飢えてしまうではないですか！」

「……………」

「殿下、意味も無くか弱き者へ虐げる事はお止めくださ　「ガリ
ア宮殿に咲き誇る二輪の薔薇（背徳の愛）」……………」

……………男性の同性愛は美しいモノですわ！」

「一応言っておくけど、これ外に出たら即打ちく「申し訳御座いませんでした」速っ！」

即座にジャンピング土下座を敢行した侍女長に呆れを覚えた。

まあ、とりあえず。

「侍女長エリザは侍女に降格の上、一年の給料停止。あとその本やその類は回収後に焚書で」

「うううう……………酷いですわ殿下……………私の待つ人（読者）が飢えてしまいますのに……………」

「そんな腐った読者は飢えて死ね。氏ねじゃなくて死ね」

オレで濡れ本作んな。

というか、王族をネタにするとかマジで命知らずだぞ。

「それとだ。今後、王族関係でそういった薄い本を作らない様に。本気で物理的に首を切られても仕方が無いぞ。てなわけだ戻って良いぞ」

「うう……………」

うつむいたまま元侍女長はオレの部屋を出ていった。

「全く頭が痛い」

「ははは……流石にやり過ぎだったのではないのですか？」

「コレを見てもか？」

取り出したのは一冊の本。作者はエリザヴェート・サフラン。まあ、名前からしてさっきの元侍女長だろう。

その本のタイトルにはこう記されていた。

少年達と指南役の熱き交わり……激しくも淫らな稽古……

「……もう1年給料カット追加でよろしかったのでは？」

「だよなあ……」

その後、所謂BL系の焚書運動を行って一応の排除は出来た。まあ、王族だけはという但し書きが付いたんだけどさ。エルネストマジ泣きしたのが印象に残った事件だった。

嫌な事件だったね……。

日本食INGリア王家

今回、王家三人兄弟だけで日本旅行へ行きました。
そんなわけで、いままで行く機会の無かった寿司にも行ってみた。

「ほう、これが寿司か」

「魚を生で食べられるくらいに新鮮なんだね」

「序に言えば海の魚だからっていうのもあるかもね」

「なら、まずはタイだ」

「僕はウニにしてみようかな」

「縁側で」

「……ふむ。シヨウユとワサビ、そしてコメ……シャリだったか。それが魚の生臭さを消した上に旨味を増幅して魚の甘味が溶けるように舌へと広がるな。美味だ」

「うーん。ウニの食感と共になつとりとした食感と甘さ、そしてウニに感じる磯の香りがほのか鼻孔を擽って凄く美味しいです」

「あー、縁側うめー」

「おい、ジオルジュ。お前もなんか詳しくコメントしろ」

「はいはい。ま、なんというか。縁側の快い食感と共に脂の旨味と甘味が舌にじんわりと広がって、その味がシャリと混ざり合って味わいの深さを増してるね」

「よし、店主。俺にも縁側を頼む」

「次はカンパチでお願いしますね」

「アワビをお願いします」

「確かにジオルジュの言う通り、縁側の味とシャリの味が混ざり合った味わいがなんとも言えんな」

「これも中々……魚とシャリの塩梅がお互いを引きたてて美味しいとストレートに表現できますね」

「……アワビのコリコリとした食感。そして噛めば噛むほどに染みでる旨味が口の中に広がってこれが噛み締める幸せなのかと思うね」
「ところで兄さん。何時まで味評論をするの？」

「大人しく喰いたい」

「面白みのない奴等だ。わかった、わかった、大人しく喰って構わん」

「松コースお願いします」

「あ、僕も」

「聞け。アワビのステーキを頼む」

「あ、ならオレもアワビのステーキと天ぷら盛り合わせをお願いします」

その後、心行くまで寿司を楽しみました。

サイドストーリー ショート&ショート（後書き）

BLなんてオレが書こうとしたらノクターンかムーンライト直送になっ
てしまいます。

だから書けません。ごめんなさい。

寿司は私の味の記憶から引つ張り出したのを私なりの表現で纏めた
ものです。

なので、これジャナイ等と食べて損したなどと言われても責任は負
いません。

ちなみに私は縁側やアワビ大好きですビバ 寿司

だから、お寿司食べたい。

大事な事なので二回（ry

8話（前書き）

学園入学前です。

説明とグダグダな回です。

最近2次ZクリアしてPSP02iをやろうとしたらインターネットマルチができなかった件。

私はキャストに出会って人生が一つ変わりました。
キヤス男いいよキヤス男。

だから……「。。」ハコモアイシテ

ゼロ魔関係ねえ……。

8話

ガリア ヴェルサルテイル宮殿のジオルジュの自室にて。

その姿は白亜の獣。

されど神聖な気を纏っており、その面は祭りを楽しむ童わらしの様にも見えた。

共に楽しもうぞ。

「兄様、チェイン稼いで。才人は50超えたらPAをお願い。ユーグは援護を」

「OK、シャルロット」

「おう」

「了解」

戦場いくさばの先陣を駆けるのは獣の耳を持つ所謂獣人とも言える男が剣と盾を持ち、剣を輝く面へと振るう。

それに続くのは、全身を鋼の装甲に身を固めた騎士の様に見える男。短銃を両手に持ってそれを撃ち続けた。

それと同時に、槍を持つ鋼の騎士が正確無比に面へと突きを放った。最後に、蒼い髪の少女が杖を振るい獣の足を氷の中へ閉じ込める。その繰り返し変えしの末、獣の足に着いていた輝く面が砕かれたのだった。

よろしい。

「ヤオロズたんかわいいよヤオロズたん」

「兄様自重」

「ジョルジュ……」

「さすがにフォローできねえよ」

何でヤオロズさんの良さが解らないんだろう……。

ま、気を取り直して俺達は何をやって居るかと言つと。

一言でゲームだ。

何故かこちらの地球では2000年時点でゲームの発売などが前世の地球より10年前後早くて既に先日3DSなんかも発売されている。

今やっているのはPSPだけださ。

まさか、PSP02の新作が出ているとは……前々から興味あったけど結局出来なくて結局死んじゃったしなあ。

サイトの方の地球で発売されたと聞いた時は地球へ予約しに行ったくらいだもん。

ヤオロズたんなんて子もいて万々歳だぜ。

ちなみにラウルはラウルの自室でストーリー攻略中。HMオールランクスを目指しているらしい。

「兄様、手が止まってる!」

「うおつと!」

危ない、危ない。

自動回復付けて無かったら死んでたよ。

話は変わるけど、今現在ガリアは地球との貿易や技術の吸収でそれなりに潤っていたりする。

まあ、平賀貿易会社の成長具合というか、儲け具合がおかしい事に気が付いた政府がガリアとの交易を結んだり、お互いの技術吸収と本当に色々あった。

そのおかげか、最近日本ではエコなテクノロジーと言う訳で。大気中に存在する新エネルギーを利用した発電や。

魔法技術と科学技術のハイブリッド動力なんかも普及しているように経済的に良好らしい。

げに恐ろしきは地球の科学者。1年くらいで吸収したと思ったら新しい技術を生み出し始めた事を知った時にはもう苦笑いしか出なかったくらいだ。

しかし、その勤勉さというかマツト具合？に触発されたこちら側の技術者も向こうの技術を吸収していつている。

向こうが科学技術の開発環境のアドバンテージがあるのかこちら側の魔法技術が乏しいのか中々に判断が困る所だ。

とはいえ、こちら側では基本的に環境を極力汚さない方向で技術発展を目指しているのでゆっくりとはいえ確実に進んではいる。

また、大隆起の心配があったが2年ほど前に風石の大鉱脈へと続く穴を開け。穴を通して大鉱脈にある風石の風の力を精霊術を応用した技術で地上に移して利用する技術をオレとサイトと技術者達で作りに出す事が出来た。

それによって現在、ガリアでは風石の暴走の心配が無くなった事でハルケギニアの問題の一つが解決できたのであった。

そうそう、地球との行き来だけだ。

何時までもジョゼ兄の魔法のみの行き来が出来なくなる事が最初からわかっていたので、

ジョゼ兄とサイトとで大きな鏡を加工して地球とハルケギニア間を移動出来るマジックアイテムの鏡を作ったのだ。

ちなみにオレの部屋にもサイトの部屋に通じるものが一つ置いてある。

その所為か、たまにサイトの部屋でごろごろしてても普通に対応されていたりする。

序に言えば、サイトの部屋のネット回線をハブで経由してネットワーク環境完備だったりする。

あとは、シャルロットがゲームに目覚めてからはオレの部屋に入り浸っていたりする。

オルレアン邸に戻っても、風石を利用した充電器や発電機でゲームしているらしいし。

その所為で目が悪くなってシャルロットの母親がゲームは1日1時間だけとか何処かで聞いたような話ではある。

すごく、庶民的です。

後、シャルロットの性格がタバサ寄りになっているのかは永遠の謎である。

……

ヤオロズたんを倒してから、色んなミッションを回りつつ、スナック菓子をつまみながら皆でゲームを楽しんでいる中でジョゼ兄が部屋に入ってきたのだった。

ジョゼ兄はオレを見て溜息を吐きながら言った。

「ジョルジュ…いくらオフだからとはいえその格好はどうかと思うぞ？」

「着替えるよ…」

「そういえばジャージでしたね」

「私も家ではジャージ」

「俺も家だとジャージだけど…一応ハルケギニアでそれはどうかと改めて思うぞ？」

皆から言われている様に今のオレの格好は青いジャージなのだ。

一応、スポーティーなジャージとはいえ、何処まで行ってもジャージでしかない。

「才人、部屋借りるぞ」

「おう」

部屋主の許可も取った所で、着替えとマントを持って鏡の中へ入った。

鏡を抜けると日本の男子学生の部屋といえばこんな感じだろうという部屋があった。

たぶん日本の学生の部屋をイメージできているのならばそのイメージ通りの構成だ。

サイトのベッドの上に服を置いて、オレはジャージを脱いで着替え始めた。

着替えた服は白を基調にした上下に、そして青いマントというシンブルなものではあるが、

近年ガリアで流行っている日本の和 문화が混じっており、少々誤解も承知で言うのなら洋風的なシルエツトで裝飾やパーツが和風ではないだろうか。

はつきり言つて日本だとコスプレにしか見えない。

どこことなく氣恥ずかしさを感じたので、そそくさとハルケギニアに戻つて行つた。

「そんな格好しているとジョルジュが王子様だつて思い出すよな」

「それに関してはノーコメントさせて欲しい」

「ごめんなさい」

「全く、もう少し王族らしくしたらどうなんだ」

「こんな事言われると思つたよド畜生！」

失礼な奴らだ。

「そんなことより、本題に入るぞ」

「ひでえ」

「さて、少々面倒な事になつてな。トリステインがガリアに対して交換留学をしないかと言つてきているんだ」

「トリステインって、何処だっけ？」

サイトが聞いてきた。

まあ、どうでもいい事何て覚えて無いよね。

「私とお父様の家、オルレアンの領地の隣にある国。領土、經濟、

文化、軍事力：ほぼ全ての面でガリアの下を行っている国。でもプライドだけはガリアの遙か上。」

シャルロットが解説するが、普通の認識なのに悪口になるなんてすごいね。

「シャルロットはその国が嫌いなのか？」

「ただ、ありのままに言うと思口になってしまった」

「……まあその国が来年にトリステインに留学生を多数送って欲しいそうさ。その中にジョルジュとシャルロットのどちらかは必ず送って欲しいとな」

「どう見ても人質です。本当にありがとうございました」

「シャルロット自重。で、そいつら馬鹿なのか？ ジョルジュとシャルロットなんて人質以前に自力でのんびり帰ってこれるだろ？」

シャルロットがたまにネタを言うが今回はサイトがツツコミを入れてくれた。

オルレアン関係者の前で言うとオレが毎回睨まれるんだ。理不尽である。

ちなみに、本気出せば既にヘキサゴンなシャルロットと精霊術師なオレだと普通に飛んで帰れる。

あ、でもシャルロットは進行方向にある食物は全部食いつくげふう……。

シャルロットごめん、睨まないで。

「……私もサイトと同じ意見」

「要約するとだ、『東方交易で東方文化にかぶれたガリアが心配な

ので兄弟国でもあるトリステインが素晴らしきハルケギニアの文化を教え直してあげましょう！』ということらしい。北花壇にも調べて貰ったが概ね同じだった」

「……頭痛が痛いとはこのこと」

「だからシャルロット自重。でも、それってケンカ売ってるの？」

「少なくとも手紙を書いた発言者は善意100%だろう。なぜならば書いたのがアンリエッタ王女だからだ」

「「ああ、成程」」

「誰それ？」

才人は知らないか。

「あー……解りやすく言うと、絵本に出てくるような「おとぎ話のお姫様」って感じそのものかな？」

「付け加えるならば、仕事をしないジオルジュ兄様」

「おい」

「まあ……諸々事情はありますが、王位継承権第一位にも関わらず政治や統治といった帝王学を学ばず、詩や演劇を好むお姫様でしょうか」

「ちなみに、現在トリステインは王位が不在」

「……あれ？ おかしくないか？」

「現状、取り柄と言う取り柄はトリステイン王家という血統書付の王族の血ぐらいかな」

「なんか悪口になってないか」

「さつきもシャルロットが言ったけど、事実を言つと何故か悪口に聞こえるんだ」

「そのぐらいヤバいのか？」

「「「その通り」」」

ぶっちゃけ、リスクの割にリターンが少ないと言う国だから狙われないからなあ。

「とりあえず、その話は置いておく事にしてだ。別に断るつもりだが一応耳に入れておいた方が良さそうと思って持って来たんだが」

「まあ、別に良いですよ？」

「……いいのか？」

「人質になるわけじゃないけどさ、特等席で見物くらいはしてみようかと思って」

「……お前の事だからそのまま舞台に乱入するのではないのか？」

「……」

「目を逸らすな」

「……レコン・キスタの様子見では駄目？」

「……フン、好きにしろ。ただし、留学生は『お前達』から選ばせてもらう方がいいな？」

「はい」

そう言っただけで兄は部屋から出ていった。

「……と、言う訳で付き合ってもらっけどいいな？」

「はあ、解りましたよジョルジュ殿下。何処までも付き合います」

こう言う時ユーク達存在はありがたい。
ホント、俺には勿体ないくらいだ。

「……なんだよその眼は」
「いや、どうせ俺なんかには勿体ないとか思っ
ていそうでしたので……貴方だから着いて
きているんですけどね」
「え？」
「コホン。とにかく、トリステインへ行く
為の準備をしておきましよう！」
「あ、ああ」

ユーグは何を言おうとしたんだろう？

「普段馬鹿なくせに変な所で自虐かつ鈍感な
所が未だに理解不能」
「全くだな」
「サイトも人の事言えない」
「え、なんで？」
「……もういい」
「なんで杖で叩くんだよ！痛いつて！」

全く、早く気が付け恋愛原子核平賀型。
え、俺が言っ
な
ん
で？

8 話（後書き）

シャルロットのイメージがつかないので性格がタバサっぽくなっています。

トリステインをありのままに言うと思口になってしまう。
良い所あったら教えてくださいorz

大隆起については数行で解決してしまいました。
なんでだろう？

もっとエピソードあったはずなのに……。

次回入学編！というわけで、次回のキーワードは三つ！

ちよっかいをだすおっぱい、

消えたデータ、

絶望シャルロット

次回をお楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5982n/>

ガリア王家に転生しました。（再構成、オリ主転生チート）

2011年5月7日02時37分発行